

はばたき第四十集発行に寄せて

埼玉県教育委員会 教育長 関根 郁夫

「人権意識にめざめた幼い『はばたき』は、きっと多くの子どもたちのはばたきを誘い、また、広く社会の人々の心をうつことでしょう。」これは「はばたき」第一集発刊のことばの一節です。昭和五十二年に第一集を刊行して以来、この一節のとおり、「はばたき」は児童生徒の人権意識の高揚を図る大きな役割を果たしてまいりました。社会の急激な変化とともに新たな人権問題も生じておりますが、「自分やほかの人の人権を大切に守っていこう」という児童生徒の思いは今も昔も変わることなく、強く伝わってきます。

この作文集を通じて、児童生徒一人一人が、自らの能力や適性を生かし、社会の中でお互いのよいものを積極的に与え合い、分かち合い、助け合う役割を果たすことのできる「共助」の心をもった心豊かな「人財」として社会にはばたくことを願っています。

作文集のさらなる活用を

埼玉県教育局市町村支援部人権教育課長 吉野 雅彦

今年度も、児童生徒が日常生活にある様々な差別や偏見に気づき、互いの人権を尊重するためにはどうしたらよいかを、深く考えることのできる作品が、この作文集には載せられました。今回は、第四十集という節目にあたり、「はばたき」が人権教育の充実のための学習資料や人権啓発資料として学校・家庭・地域で広く活用されることを願い、活用例を巻末に掲載しました。多くの方に作品に触れていただき、人権尊重の輪がさらに広がることを願っております。

終わりに、すばらしい作品を応募してくださった児童生徒の皆さん、御協力をいただいた保護者の方、御指導をいただいた先生及び編集委員の皆様にお礼を申し上げます。

も く じ

はばたき第四十集発行に寄せて
作文集のさらなる活用を
文集を読むみなさんへ

小学校の部

小さなゆう気とやさしさ	小二	1
なかよし	小二	4
人をたすけるゆう気	小二	7
やさしさマーク	小二	9
ゆう気をもってがんばったよ	小二	12
教えてあげたら教えてもらったよ	小二	15
みんなの命	小二	17
一人一人にあるこせい	小二	20
はだ色	小二	23
友達っていいな	小二	25
心に伝わるやさしい気持ち	小二	29
初めて知った当たり前	小二	31
私のお母さん	小二	33
ちがいを認め合って	小二	35
日本とタイのかけはしに	小二	37
大好きな祖父と祖母	小二	39

中学校・高等学校・特別支援学校の部

小さな命	中一	42
母から学んだ思いやり	中一	44
災害時の人権問題、差別について	中一	46
一足のくつで一つの笑顔	中一	49
障害のある人と共に生きる	中一	52
障害	中一	54
神様からのおくりもの	中一	56
偉いことが当たり前になる世の中へ	中一	58
おにぎり	中一	60
大切なメッセージ	中一	62
世界の子供たちの人権について	中一	64
新たな自分へ	中一	66
言葉Ⅱ刃物	中一	68
社会と私	中一	70
「自分らしさ」と「相手らしさ」	中一	72
「一人」になる恐怖	中一	74
「はばたき」活用例	中一	75
作品掲載者一覧	中一	79
編集委員一覧	中一	80

文集を読むみなさんへ

一 この文集には、次のようなことが書かれた作文をのせています。

○ 「自分も、ほかの一人一人も、みんな大切ないのちをもった人間なのだ。」と考えている。

○ 人間が人間を苦しめている「まちがい」に気づき、ゆるしてはならないと考えている。

○ まちがいを直すために、自分はどうしたらよいか、どんな学級や社会にしていいたらよいかを考え、行動しようとしている。

二 作文を読んで次のことを学びとり、自分の問題として考え友達と話し合ってみましょう。

○ 作者が、自分となかまとの生活についてありのままくわしくみつめていること。

○ 「へんだな。」「これでいいのだろうか。」「と思った点について、いろいろな立場からよく考え、自分の意見

をのべていること。

○ 作者や文中に出てくる人の、どんなところがすばらしいか。また、どんなところが不十分なままになっているか。

三 この文集から学んだことをもとにして身の回りのことを見つめ、作文を書いてみましょう。

○ 書くことを通して、ふだんぎもんに思っていたことをはっきりさせ、それについて自分の考えをたしかめる。

○ 自分のまわりの人の考え方、生活のし方について気づいたことを、できるだけくわしく書く。

○ 書いたことをもとに、「人間を大切にし、ともに生きていく力」をもった人間になるよう努力する。

掲載作品の中には、一般的には当事者を蔑視したり差別したりするような言葉が使われているものもありますが、作者の意図を尊重し、一部原文のまま掲載しています。

小さなゆう気とやさしさ

小 二

わたしはお休みの日になると、いつも大きな公園にあそびにいけます。公園にはたくさん人がいるので、お父さんと妹と手をつないで、まい子にならないようにしています。

その日は、いつもよりたくさんの人があそびに来ていました。すべり台を何回もすべってつかれてきたので、休けいをしてようと思ったとき、三才くらい

の女の子がひとり歩いて来ました。どうしてひとりなんだろうと思って見ていたら、女の子はなきだしてしまいました。わたしは、

「どうしたの。ママはどこかな。」

と聞いてみました。でも、女の子はなくてばかりです。何とかしなくてはと思って、

「この子のお母さんは、どこですか。お母さんは、どこですか。」

と大きな声でさげんでみました。するとすべり台の方から女

の人が走って来ました。もしかしたら、この子のお母さんかもしれないと思い、女の子と手をつないで近くに行きました。女の子はすぐに女の子をだきしめました。それから、

「お姉ちゃん、ありがとね。本当にありがとう。」

と、言ってくれました。女の子も、え顔で手をふってくれました。大きな声でさげんだときは、少しはずかしかったけれど、ゆう気を出してよかったなと思いい、わたしもうれしくなりました。

家に帰って、お母さんに話したら、

「すごいね。えらかったね。」
と、言っただきしめてくれました。わたしは、

「お母さんがいつもやってい
ることを、まねしたただけだよ。」

と言いました。わたしのお母さんは、スーパーなどで、ひとりで歩いていたり、なっていたりする子を見かけると、やさしく話しかけて、お母さんやお父さんを見つけています。それをいつも見ていたから、わたしもお

母さんと同じように、やさしく
することができたのです。

わたしは小さなゆう気とやさし
さしきで、だれかをえ顔にする
ことができるということがわ
かりました。ひとりではなく、
みんなのゆう気とやさしさが
あつまれば、もっとたくさんの
人がえ顔になれると思います。
これからも、こまっている人が
いたらゆう気を出してたすけ
たいと思います。わたしのゆう
気とやさしきで、え顔をいっば
いにしていききたいです。

なかよし

小 二

ぼくは、一年生のときに大きいお兄ちゃんたちにへんなあい名をつけられて、からかわれました。同じクラスの友だちと休み時間に外あそびをしているときに「からあげ」と言われました。ぼくは「からあげ」と言われてとてもいやな気持ちだったのでも、「やめて。」と言いました。でも、やめてく

れなかったのでも、先生に言いました。先生が大きいお兄ちゃんたちにちゅういをしてくれました。それから言われなくなりました。よかったです。ぼくは、からかったり、いじめたりする人のほうはふざけて言うけれど、からかわれる人のほうはとてもかなしくていやな気持ちになるんだなと思います。だから、ぼくは、友だちと話すときも、いやなことばを言わないように気をつけています。ぼくが言われていやなことばは、友だちも言われた

らいやなことばだと思います。でも、友だちといやなことばで言い合いをしてしまうときもあります。そのときは、「ごめんね」と言うようにしています。友だちも、「ごめんね」と言ってくれるのでなかなかおりします。「ごめんね」ということはとてもだいじなことばだと思います。

ぼくがもう一つだいじなことばだと思うのは「ありがとう」ということばです。ぼくが一年生のとう下校のとき、ぼくのはんのはん長さんは、ぼくの

おもいランドセルをもつてくれたり、いろいろな話をしてくれたりして、とても楽しくとう下校できました。だからぼくは学校のとう下校が楽しかったです。はん長さんにはとてもかしくやをしていたけれど、はずかしくてちよくせつ、「ありがとう」と言うことができませんでした。ちくの六年生をおくる会のとときに、「ありがとう」と手紙を書いてつたえました。つたえられてよかったです。これからはずかしがらずに、「ありがとう」を言いたいです。

ぼくは、高学年になったら、
ぼくのはんのはん長さんみた
いに、小さい子たちにやさしく
できるお兄さんになりたいで
す。もし、小さい子がからかわ
れたら、「だめだよ。」と言え
るお兄さんになりたいです。

人をたすけるゆう気

小 二

わたしは、やき肉やさんでごはんを食べていました。デザートをとるところで、こまっっている、目のふじゆうそうな女の子がいました。わたしは、やさいをとるところでその女の子を見ていました。はじめは、どうすればいいのかわからなかったけれど、わたしはゆう気をもつて、

「だいじょうぶ。何がとりたい

の。」

と聞いてみました。すると女の子はわらって、

「これがほしいの。とってくれる。」

と言ったので、わたしはえ顔で、「はい、どうぞ。」

と、女の子がとりたかったデザートをわたししました。女の子は、「お姉ちゃんありがとう。また、たすけてね。バイバイ。」と言って、え顔でお母さんのところへもどって行きました。わたしはすっきりした気もちになりました。目のふじゆうそう

な子は、よろこんでくれました。中にしていきたいです。

よの中にはいろいろな人がいます。目の見えない人、耳の聞こえない人、手足のふじゆうな人、車いすの人、みんなだいいじゃないのちをもっています。ゆう気をもつてたすけると、たすけた人もたすけられた人もみんながしあわせな気もちになります。わたしは、こまっている人を見つけたら、ゆう気をもつてたすけられる、やさしくて思いやりのある大人になりたいです。そして、もっとみんながえ顔になれるあたたかいよの

やさしさマーク

小 二

わたしがおじいちゃんの家
にあそびにいったとき、おじい
ちゃんの車に、「ちようちよ
のマークがついていることに
気がつきました。わけを聞くと、
耳がよく聞こえない人がうん
てんする車につけるマークだ、
ということがわかりました。そ
のことを聞いたわたしは、耳が
よく聞こえない人が、車をうん
てんするなんて、むりだよ。あ

ぶない、あぶないよ、と思いま
した。でも、このちようちよの
マークには大切なやくめがあ
りました。それは、町の中でこ
のマークを見かけた人にちゆ
ういをしてうんてんしたり、こ
うどうしたりするようには、知ら
せることです。

わたしは、車をうんてんする
とき、耳がよく聞こえないと、
どんなことがたいへんなのだ
ろうとそうぞうしてみました。
たとえば、ほかの車が近づいて
くる音やきけんをつたえるク
ラクシヨンの音、ふみきりの音

もよく聞こえません。それは、とてもこわいことだと思いません。だから、きつとうんてんするスピードがおそくなってしまうと思います。それに、こうさてんでは、ほかの人よりもちゅういしてうんてんするため、車をはっしんさせるのがゆっくりになってしまうと思いません。

だから、このマークを見かけたときには、まわりの人がよゆうをもつてうんてんしたり、ちゅういぶかくうんてんしたりすることが大切なのだそうで

す。そうすることで、耳がよく聞こえない人も安心して車でかいものにでかけたり、うんてんを楽しめたりするのだと思います。

わたしは、お母さんにほかのどんなマークがあるのかをたずねました。すると、うんてんめんきよをとったばかりの人がつける「しよしんしやマーク」や、お年よりの人がつける「こうれいしやマーク」があることがわかりました。こうしたマークは車につけるもので、マークを見ても、わたしには何もす

ることができません。わたしにも、何かできることはないかなと思ひ、お母さんにたずねました。すると、おなかに赤ちゃんのいる人がつける「マタニティマーク」や、電車の中に「ゆうせんせきのマーク」があると教えてくれました。これを見かけたときには、せきをゆずったり、やさしく声をかけたりするといいと知りました。

わたしたちの生活には、このようなマークがあふれています。どのマークも、人と人がたすけ合うための、「やさしさマー

ク」だと思ひました。でも、本当に大切なことは、マークのある、なしではありません。どんなときも、こまっっている人を見かけたら、やさしくたすけるということだと思ひます。わたしも、学校の中でこまっっている友だちや一年生がいたら、やさしく声をかけたり、手つだったりしています。友だちもわたしをたすけてくれるのでうれしいです。もっともっとやさしさがひろがるといいなと思ひます。

ゆう気をもつてがんばったよ

小三

これは、わたしが見ていたAさんのお話です。

一年生のころ、Bさんたちは、休み時間ごとにろう下に集まって、話し合いをしていました。そのメンバーは三人です。Aさんのことをなかまはずれにしたり、悪口を言ったりしていました。なかよしのときもあつたけれど、だんだんAさんがなんだかかわいそうに思えてきました。それを見ていたわたしは、Aさんに声をかけました。「何かいやなことでもあつたの。」でも、Aさんは、

「何でもないからだいじょうぶだよ。」
と言っていました。わたしには、だいじょうぶそうには見えませんでした。心の中で心配でした。心配になって、Aさんのことが気になって仕方ありませんでした。

わたしが、Aさんのことを助けようとする、意地悪をしていた友だちが来て、

「何でもないからあっち行って。」
とか、

「かんけいないでしょ。」
と言われて、毎日話をするのができませんでした。わたしは、とても心配になりました。

一週間たつて、Aさんを見かけると、Aさんは、校庭を一人で歩いていまし

た。顔を見ると、目からなみだがあふれていました。わたしは、ふしぎに思ったので、言葉をかけました。

「どうかしたの。また、Bさんたちに意地悪されたの。」

Aさんは、小さな声で、

「うん。」

と答えました。

「なかまはずれにされちゃった。」

と、悲しそうな顔で言いました。わたしは、はずかしかかったけれど、ゆう気をもつて、Aさんの手をひっぱりました。そして、Aさんといっしょに、Bさんのところまで走って行きました。その場所に着くと、Bさんの顔を見て、大きな声ではっきりと言いました。

「Bさん、Aさんがいないということ、

知っているの。」

すると、

「知らないよ。Aさんないているんだ。」

と、とぼけた顔をして言いました。続けてわたしは、

「Aさんのこと意地悪するの、ぜったいやめて。」

と言いました。言っているとき、心ぞうがどきどきして、わたしもいじめられるのではないかと、ふあんになりました。でも、言い終わったあと、心がすっきりしてうれしかったです。

このあと、Bさんは、Aさんに、「ごめんね。」

と、あやまり、Aさんもわたしに、「ありがとう。」

と言ってくれました。わたしは、とてもうれしかったです。今までは、先生やお父さん、お母さんの力をかりて言うことはできたけれど、自分でゆう気のある行動をとったことは、はじめてだったからうれしかったです。

人に意地悪をすることは、ぜったいにいけないことだと思います。意地悪をした人も意地悪をされた人もいやな気持ちになります。みんなが気持ちよくすごすことができますと楽しい学校になると思います。

教えてあげたら 教えてもらったよ

小 三

ある日、学校で算数のプリントをしました。しばらくして、プリントが終わりまりました。わたしは、先生に丸をつけてもらいました。すると、友だちに、「分からないから教えて。」

と言われたので、わたしは、友だちのところに行きました。大体できていたので、わたしは少しだけ考え方を教えました。友だちが全部分かったので、わたしが自分のせきにもどろうとしたら、友だちがわたしに、「教えてくれてありがとう。」

と言ってくれました。わたしは、とてもうれしかったです。

次の日、その友だちがわたしに算数のべつの問題を教えてくださいました。友だちは、休み時間に、てつぼうのさか上がりも教えてくれました。わたしは、まださか上がりを合かくしていないので、とてもうれしかったです。友だちも少し前までてつぼうのさか上がりができなかったけれど、いっぱい練習してできるようになりました。だから、どうすればできるようになるのかコツを一生けんめい教えてくださいました。わたしは、友だちはとてもやさしい子なのだなと思いました。

算数を教えたときに言われた、「ありがとう。」

がうれしかったので、わたしも算数や
てつぼうを教えてもらったとき、

「ありがとう。」

を言ってみました。そうしたら二人と
も、え顔になりました。

友だちは、こんなふうに教え合いと
え顔とふわふわ言葉でつながっていく
のだなと思いました。これからも、み
んなと助け合ってえ顔で楽しく学校で
勉強したいです。

みんなの命

小 三

ぼくのお母さんのおなかには、今、赤ちゃんがいます。だから、ぼくは、お母さんのお手つだいをがんばっています。お母さんがおなかにけがをしましたら、おなかにある一つの命がなくなってしまうからです。

さいしよに、お母さんのおなかに赤ちゃんが来たとき、ぼくはなぜか泣いてしまいました。お兄ちゃんになることが楽しみで、うれしい気持ちだったのとお母さんがぼくのことを見てくれなくなってしまうのではないかと、かと思つて、かなしくなつてしまつた

からです。いつしよに赤ちゃんの話を知りました。ぼくよりずっと小さい弟は、いつまでも一番下の子でいたかっただと思ひます。お父さんとお母さんは、

「赤ちゃんが生まれても、あなたたち二人を思う気持ちは、今までとかわらないよ。」

と言つてくれました。ぼくのおんなな気持ちは、少しなくなりました。

そして、お母さんはごはんが食べられなくなつて、トイレではいたり、ふとんでねていたりすることが多くなりました。ぼくは、お母さんが病氣になつたのかと思つて、すごく心配になりました。だけど、これは赤ちゃんが生まれるためにひつような「つわり」だと

ぼくは知りました。とてもつらそうな
お母さんを見て、このときから、ぼく
はお手つだいを始めました。せんたく
ものをほしたり、たたんだりしました。
はじめておふろそうじにもちようせん
しました。弟もいっしょにお手つだい
をがんばりました。お母さんがごはん
を食べられるようになる、お母さん
のおなかが少しずつ大きくなってきま
した。

ある日、お母さんに、
「おなかをさわってごらん。」
と言われて、そつとさわってみると、
ポコツと自分の手にしんどうをかんじ
ました。お母さんのおなかにいる赤
ちゃんをかんじることができて、ぼく
はすごくおどろきました。今では、ポ

コツではなく、ボコツとけつたりパン
チをしたりしているようで、お母さん
はたいへんそうです。だから、ぼくは
おなかの赤ちゃんに、

「お母さんをこまらせちゃダメ。」
と、話しかけます。さいしょは、赤ちゃ
んが生まれてくるのをいやがっていた
弟も、今では、楽しそうに赤ちゃんに
話しかけています。

ぼくは、二年生のじゅぎょうで、自
分が生まれた時のことや赤ちゃんが生
まれる時のことを勉強しました。先生
は、

「赤ちゃんが生まれるときは、はなか
らすいかがでるくらい、いたいんだ
よ。」
と、教えてくれました。今までもお母

さんはたいへんな思いをしてきたのに、
さいごにまたいたい思いをするのだと
思うと、ぼくはとても心配です。ぼく
や弟をうむ時も、お母さんは長い間た
いへんな思いをして生んでくれたのだ
とわかりました。だから、ぼくは、お
父さんお母さんがくれた命を大切にし
ていかなければいけないと思いました。
これから生まれて来る赤ちゃんのこと
も大事にしていきたいです。そして、
お母さんや弟、お父さんや友だちみん
なにも元気でいてほしいと思います。

一人一人にあるこせい

小 四

わたしは、クラスの友達にくらべて、とてもせが低いです。ほいく所に通っていたころから、せの順でならぶ時は、いつも一番前です。げんいんを調べるために、けんさ入院をしたこともありました。クラスで一番せの高い友達のことを見て、うらやましいなと残念な気持ちになったこともありました。けれど、せが低いことは、「わたしのこせいなのだ。」と、自信をもって思える出来事がありました。

二年生のころのことでした。入学したばかりの一年生に、

「あの子小さいよね。」

「うん。ちびだよね。わたしより年上なのに。」

と、ひそひそと言われました。本人たちは悪気なく言っていたようですが、わたしの心は、とてもきずつきました。それからわたしは、「どうしてわたしは、友達よりもせが低いのだろう。どうして年下の学年の子なのに、わたしよりもせが高い子がたくさんいるのだろう。どうして。」と、考えるようになりました。でもいくら考えても答えは出ませんでした。たくさんごはんを食べなくても、苦手な野菜を食べても、なかなか大きくなれませんでした。

次の年、まだいやな気持ちが続いていました。他の学年の人にろうかです

れちがったときも、

「すごく小さいね。」

と、わざわざ振り返って言われました。

習い事では、他の学校の男子に、

「ちび、ちび、ちびだ。」

と、何回も言われました。また言われるのではないかと不安になって、

「もう学校に行きたくない。」

と、泣いたことがあります。どうしてわたしはせが低いのだろう。答えが出ないことを考えるのは、とても苦しくて、とても大変でした。考えても考えても、やっぱり答えが出なかったのでも、お母さんに相談することにしました。お母さんは、少し考えてからわたしに教えてくれました。

「それはね。あなたの体が、あなたに

はその大きさが合っていると思っ

決めてくれているの。他の子にくら

べたら小さいかもしれないけれど、

あなたにはその大きさがちょうどい

いってはんたんしているのだと思う

よ。あなたはあなただから、大きく

なるときがきたら、そのときにちや

んと大きくなれるのだからだいじよ

うぶだよ。今のあなたが大好きよ。」

わたしは、はっとしました。なんだ

か心の中の氷がとけたような、すうつ

とした気持ちになりました。もっと早

く相談すればよかったと、少しこうか

いもしました。

「今のわたしにはこの大きさがちよ

うどいい。」お母さんに教わった言葉を、

何度も心の中で言ってみました。くり

返しているうちに、なんだかうれしくなってきました。いろいろなことをどんどん思い出してきました。こんざつしているときに、下の方の少しのすき間を通りぬけ、行きたい場所にスムーズに着くことができてうれしかったこと、クラスでならんでいるときに、いつも一番前なのでとても見やすいことなど、自分のせの低さでとくしたことやうれしかったことがたくさんあったことに初めて気付きました。これは、わたしのりっぱなこせいだと、自信をもって思えるようになりました。せの低さが、いつの間にか気にならなくなつて、自然と笑顔で笑えるようになりました。

「一人一人にあるこせい」それは、

わたしがわたしであるそのものだと思います。いいことも不安なことも、すべてがそのままの自分なのだ、今は大きな声で言えます。せが低いことだからかう人がいても、もう悲しい気持ちで終わることはありません。お母さんの言葉を聞いて、勇気をもつことができました。

せが低いわたし。一番前にならぶわたし。どんなわたしも、大切なこせいです。だから、そのこせいを生かして、これからも楽しくすごしていきたいです。

はだ色

小 四

私の弟のクレヨンには、「はだ色」という名前の色がない代わりに「ペールオレンジ」という色があります。どうして色の名前が変わったのか調べてみました。

「はだ色」という言葉は、はだの色ということですが。でも、世界中にはいろいろな国や地いきがあつて、いろいろなはだの色があります。そして、そのはだの色は、その人が住んでいる場所の暑さや寒さなどにも関係しているのです。日本では同じようにはだの色をしている人が多いのに、外国には

一つの国でもいろいろなはだの色の人がいるということもわかりました。

今は、「はだ色」という名前ではなくて、「ペールオレンジ」「ライトオレンジ」「うすだいたい」などという名前が使われています。はだの色は一色ではないことに気付いたから、「はだ色」という名前が使われなくなったのだと思います。そして、はだの色を一色に決めてしまうことは差別の一つになるということを知りました。

また、国さい化で日本にもいろいろなはだの色をした外国の人がたくさん来るようになったり、同じ日本でも人によってはだの色が少しずつちがったりするから、「はだ色」と言われなくなつたという考え方もあるそうです。

もし、自分が色えんぴつやクレヨンとちがう色のはだだったとしたら「どうしてだろう。自分のはだの色は、ほかの人たちのはだの色とちがうのかな。」と考えて、とても悲しくなったり、くやしくなったりすると思います。

私は今回「はだ色」について調べて、はだの色のちがいで差別をしてはいけないということがわかりました。だから、人種差別をなくすためには、自分と他の人とのいろいろなちがいを受け入れて思いやる心をもつことがとても大切なことだと思いました。

友達つていいな

小 四

回数がふえていきました。休み時間に遊んだり話したりしてどンドン楽しくなりました。

ある日、その子がとてもさびしそうにしているのが目に入りました。

「どうしたの。何かあったの。」

とたずねたら、

「ある子がわたしのこと、ばかにしてきたの。」

と言ってきました。そのことを聞いたわたしは、ばかにした子のところへ行つて、

「友達の悪口を言わないで。あの子のことをばかにしないでよ。」

と、きびしく言いました。その子は、そのことがとてもうれしかったらしく、「ありがとう。友達になつてほしい

「ねえ、いっしょに外へ出よう。」
教室に一人残っていた女の子に声をかけました。休み時間にクラスみんなドッジボールをすることになっていたのです。わたしもあわてて外に出ようとしていたのですが、一人ぼつんとい

たその子が気になったのです。
「ドッジボール楽しいよ。さあ急いで外に出て遊びましょう。」

と言ったら、

「うん。」

と笑顔でこたえてくれました。このことがあつてその子とは、だんだん遊ぶ

な。」

と言ってくれました。わたしは悪口を言う子がいやだったし、女の子とすぐ仲良くなりたかったので、ただ助けてあげたいという気持ちになっていたのかもかもしれません。わたしは思わず、「いいよ、わたしもううれしいわ。」と伝えました。その子もにっこりほほえんでいました。

わたしたちは、日にちがたっていくうちに親しくなっていきました。学校に行くのが今までよりもっと楽しみになりました。会って話をしたり遊んだりするのがどんどん楽しくなりました。友達への思いもどんどん強くなっていききました。こうして友達になっていくのかな、と思いました。ちよつとした

声かけがきっかけで友達との交流が深まり、一日が楽しくなったのです。いつもいっしょにいらなくても、あの子がいるんだ、という思いだけで、わたしの心はふわふわしてきます。その子も、わたしに対して、「宿題、がんばれ。」「走るのがんばって。」「外でいっしょに遊ぼう。」とおうえんしてくれたり、さそってくれたりします。毎日、朝のあいさつ「おはよう」も一度もわすれることなく言うてくれます。とてもうれしい気持ちになります。小さな声かけや思いやりの一言が友達との心をつなぐことが分かりました。毎日の生活の中で親しくなったその子と、これからも楽しくすごしていきたいと思えます。ときにはけんかをすると思います

が、すぐ仲直りをしながら、もっともつと仲良くしたいと思います。

こうして友達ができ、友達っていいな、と思えるようになったわたしにも、一人ぼつんときびしい思いをしていたことがあったのです。それは、仲間はずれやいじわるをされたわけではなく、体のことで学校のプールに入ることができなくて、ずっと見学ばかりだったことです。一人で見学しているときは、みんなのことがうらやましく、いいなあ、と思っていました。けれども、見学しているとき、みんなの声や笑顔を見たり聞いたりするうちに、みんなのことがかがやいて見えるようになってきたのです。うらやましいと思っていたことが、なぜか、もつとがんばれ、

とおうえんしたい気持ちになってきました。バタ足や面かぶりクロールを必死にやっていた子にも声かけしたい気持ちでした。わたしはそのことを体育の見学カードに書きました。友達が一生けんめいがんばっているすがたや喜んでる様子、楽しそうにゲームをしている様子を見ることができただけで、こっちまでうれしくなってきたのです。友達がうれしそうに笑顔でがんばっていることを見ることで自分も同じようにうれしい気持ちになりました。この後、先生がその見学カードのことをみんなの前で読んでくれました。一人ぼつんとしていた自分が、友達といっしょに楽しさを味わえたことを知ることができました。

今は、クラスのみんな、学年全員、
そして自分の身の回りの全ての子が友
達だと思っています。さらに、四年生
になって、それ以上に親しい友達がで
きたことは、すごくうれしいことでし
た。プール見学の時に感じたみんなへ
の思いが、女の子への親友としての思
いへつながっていったのかもしれない。
ん。

これからわたしは、ただ親しい友達
とだけ仲良くしていくのではなく、一
人ぽつんとしているような子がいれば
声かけしていくつもりです。親しい友
達が、自分の身の回りにも目を向けさ
せてくれました。友達をさそったり、
意地悪には、はっきりと意思ひようじ
をしてやめさせたりして、楽しさやう

れしさを共に喜ぶ人になっていきたい
と思います。小さなきっかけが友達の
ことを考える入口になりました。

心に伝わるやさしい気持ち

小 五

わたしには、生きていたら百才になる、大好きなひいおばあちゃんがいました。ひいおばあちゃんは「にん知しよう」という病気で、わたしが生まれる前からずっと病院にいました。ひいおばあちゃんは、わたしやわたしの家族に何度会っても、だれだかわすれてしまいます。また、自分の名前もいつもちがう名前を言っていました。でも、わたしが会いに行くと、いつもにっこ笑顔を喜んでくれるので、わたしはひいおばあちゃんが大好きでした。

ある日、ひいおばあちゃんに会いに行くと、お世話をしてくれるヘルパーさんがい

ました。ひいおばあちゃんはいつものように、

「あなただれだっけ？」

とににことわたしに聞いてきました。すると、そのヘルパーさんが、

「何を言ってるの。ひ孫さんでしょ。何度言ってもおかしなことばかり言って。

ひ孫さんに笑われちゃうよ。」

と笑いました。わたしはそのとき、なんだかとても悲しい気持ちになりました。確かにひいおばあちゃんは、いつもわすれてしまいうし、何度も同じことを言います。でもひいおばあちゃんは、わたしが学校で習った歌を聞かせると、とても楽しそうにしてくれるし、ひいおばあちゃんの大好きなあめ玉をこっそりあげると、まるで子どものようにおいしそうに食べてくれます。そんな大好きなひいおばあちゃんをばかにさ

れたようで、思わずなみだが出ました。

お母さんに気持ちを話すと、お母さんが、
「とつてもやさしいなみだね。きっとその
やさしい気持ちは、ひいおばあちゃんに
伝わっているし、わすれてなんかいない
と思うよ。」
と言ってくれました。わたしはそのお母さ
んの言葉を聞いて、ほっとして温かい気持
ちになりました。きっとひいおばあちゃん
は、心の中でいつもわたしの名前をよんで
くれていたし、わたしたちが会いに来るの
を、楽しみにしてくれていたのではないか
と思います。なぜなら、わたしの思い出す
ひいおばあちゃんは、いつもにこにこ笑顔
だったからです。

声に出して言われたことはなかったけ
れど、わたしには今もひいおばあちゃんの
やさしい気持ちが伝わってきます。そして、

初めて知った当たり前

小 五

先日、初めて都電あら川線に乗った。路面電車に初めて乗ることになったので、出発からわくわくしていた。母と二人で乗ることになった。

小さな路面電車は、ふだんの生活で使われているらしく、買い物ぶくろを持ったお年寄りや、小さな子どもを連れのお母さんもいた。

始発の三ノ輪橋から、ぼくたちは乗りこんだ。車内の座席はすぐに満席になったが、ぼくと母は座ることができた。そのときぼくはつかれていたもので、「よかった、これで休めるぞ。」

と思った。

二つほど過ぎると、お年寄りが数人乗ってきたので、とっさに、ぼくと母は席をゆずった。少し残念な気持ちになったが、車内の様子から見ても、席をゆずるのは当たり前だと感じた。

いくつか過ぎると車内は、身動きがとりにくいほどの満員になった。つかまる場所もなく電車がゆれるたび立っているお年寄りが転びそうで、ぼくは少しこわくなった。

ある停留場で、二本の松葉づえをついたお兄さんが乗ってきた。すると、ぼくが席をゆずったおじいさんが、そのお兄さんに向かって、「どうぞ、座って。」

と言って、その席から立ち上がった。車内を見回すと、さつきまで座っていた

人が立っていたり、手すりや立つ場所までもゆずり合っていたりして、ぼくはとてもおどろいた。

あら川遊園地前では、たくさんの親子が乗ってきた。みんな満員電車で立ったままだ。しばらくすると、小さな女の子がぐずり始めた。

最初は小さな声で泣いていたが、何分かすると車内中にひびくような大きな声で泣き出した。ぼくが気になって後ろを向くと、近くにいたおばあさんと目が合った。おばあさんは「小さい子だから仕方ないよね。」と、やさしい声で言ったので、ぼくも笑顔でうなずいた。

ぼくの前に座っていた松葉づえのお兄さんが、おりる準備をし始めた。電車が停車すると、周りの人が自然と通路を開け始

めた。ぼくからはお兄さんのすがたは見えなくなったが、後ろの方で、「まだおりていません。」

と女の人の声が聞こえてきた。ぼくは温かい気持ちになった。

電車の中は、暑くていい場所ではなかったが、ぼくはいやな気持ちにはならなかった。それは、みんなの思いやりがあったからだ。

人にやさしくすることは、特別なことで意識してやるものだと思っていたけれど、電車で会った人たちは、みんな自然に当たり前のこととしてやっていた。相手のことを思いやって行動すると、意識しなくても人にやさしくできることをぼくは知った。

ぼくは、あこがれていた都電あら川線がもっと好きになった。ぼくも、ここで知った当たり前ができるようにしたい。

私のお母さん

小 六

私のお母さんは、私を命がけで産んでくれました。お母さんは私を産んだ後に、あの病気にかかってしまったのです。でも、いまだに治す方法がないのです。

私は、そのことを初めて聞いたとき、申し訳ないことをしたなと思いました。なぜなら、私が生まれてこなければお母さんは病気にならなかつたからです。私は心の中でごめんなさいと思いました。その後も思いを引きずりながら毎日を過ごしていました。

そんな冬のある日、買い物から帰ってきたお母さんが手袋をはずしたとき、その手

を見るとむらさき色になっていました。気になってお母さんに聞いてみると、

「それは血管が収縮することで起こる病気の一つのしょう状だよ。」

と言われました。私はそのことを聞いて、心の中でやっぱり生まれてこないほうがよかったのかなと思い、ショックでした。私のせいでお母さんが傷ついたり、苦労したりしていると思うと、申し訳ないと思いました。

それからしばらくして、お母さんがまた手を気にしていたので見てみると、お母さんのつめの後ろの皮ふがめくれています。なんでそうなっているのか思い切って聞いてみると、

「血流が悪くなって起きる病気の一つのしょう状だよ。」

と言われました。そのことを聞いて、生ま

れてこなければよかったという思いが前よりもっと強くなりました。

私はある日、お母さんに病気になってシヨックだったのか聞いてみました。お母さんは、

「全然そんなことないよ。」

と言いました。私はどうしてそんなふうにしたのかとても気になりましたが、聞きませんでした。その後も聞かないようにしていました。ある日、がまんができなくなったので、思い切って、どうして病気になったのにシヨックじゃないのか聞いてみました。すると、

「あなたが生まれてきてくれたからだよ。」
と言われました。それに加えて、

「あなたの顔を見て、とても幸せな気持ちになったからだよ。」

とも言われました。私は、この言葉を聞いて

て、少し気持ちが軽くなり、うれしくなりました。私は、このことから、命の大切さを学びました。

ニュースを見ていると、殺人事件や暴行事件などいろいろなことが世の中で起こっています。みんなそれぞれのお母さんが一生けん命産んでくれたり育ててくれたりした命を、大切にしないのはおかしいと思います。私はそのような行いをする人たちが許せません。そういう人たちには、もっと命について考えてほしいのです。

私はこのような体験から、命をもっと大切にしなければいけないと心から強く思いました。そして、私はたくさんの人に自分の命、他人の命を大切にしてほしいと思います。

ちがいを認め合つて

小 六

思いやりとは、どのようなことでしょうか。優しく声をかけること、助けること、いろいろあると思います。でも、ぼくは思いやりが相手を傷つけることもあるのかもしれないと感じたことがあります。

ぼくは、生まれたときから左目に病気があります。それは「眼けん下垂」という病気で、左目のまぶたをうまく閉じたり、開いたりすることができない病気です。ぼくの目のことを知らない人は、ぼくの目のことを何気なく聞いてくることがあります。

「その目、どうしたの。」

「目、だいじょうぶ。」

みんな、何も知らないのです、心配して聞いてくるのだらうということも、ぼくなりには理解しているつもりです。でも、ぼくは、やっぱり目のことを聞かれるだけでとても悲しくいやな気持ちになるのです。そのようなときは、他の人とちがって何が悪い。ぼくは、ぼくなんだと、いつも心の中でさけんでいました。

おたふくかぜになって、病院に行ったことがありました。しんさつになって先生と話していると、先生は、

「その目、どうしたの。」

と、聞きました。ぼくは、おたふくかぜの病気を治してもらうために行ったのに、やっぱり目のことを聞かれるのだと、悲しくなったことを今でも覚えています。きっと、この先生も心配して聞いてくれたので

しよう。わかってはいますが、やはりとても悲しい気持ちになったのです。

そんなある日、買い物に行ったときのことです。車いすに乗った男の人を見かけました。ぼくはその人のことが気になって、知らないうちにその人のことをじっと見つめてしまいました。すると、その人と目が合いました。その人は、ぼくのことをとても悲しい目で見えていました。そのとき、ぼくは今、いつも自分がされていやなことを、車いすの人にもしてしまっただけではないか、と気付きました。ぼくは、目をそらしてその場からはなれました。決してその人のことをばかにする気持ちなんてなかったけれど、もしかしたら車いすの人は、悲しい気持ちになってしまったのかもありません。

人は、みんなとちがうところが気になっ

てしまうことがあります。そのときに、優しい気持ちで声をかけたり、声をかけようと見つめたりしてしまうことがあります。しかし、このとき、人とのちがいに気を取られるのではなく、その人の気持ちや考えていることを想像し、その人の立場に立って、自分の言葉や行動を考えなければならぬと思います。

その人をまるごと受け入れるのはとても難しいことです。でも、この世界には、一人として同じ人などいないのです。だからこそ、一人一人のちがいを認め合うことがとても大切です。ぼくは、これからもちがいを認め合うことを大切にしながら生活していきたいです。

日本とタイのかけはしに

小 六

私は、六才のときタイから日本に来ました。はじめは日本語がすらすらと話せなかったけれど、父や母が助けてくれて、今は話せるようになりました。

私は、日本で生まれたけれど、母の母国であるタイに行きました。だから私は、あまり日本のことがわかりませんでした。

小学校に入っただけのころは、言葉の意味がわからなかったもので、何をしていたのかもわかりませんでした。そんなときは、いつも先生や家族が助けてくれました。だんだん学校生活に慣れてくると、友達も増えました。言葉も上手になっていきました。

四年生の時、同じクラスのA君が、「タイ語で『こんにちは』は、どう言うの。」

と話しかけて来ました。私は、

「サワデーだよ。」

と答えました。すると、A君は、

「すごいなあ。タイ語を知っているんだね。」

と言いました。

こんなふうには、だんだんとクラスの人や、タイのことについて興味をもってくれるようになりました。

五年生になって、外国語の授業が始まったとき、私は、友達Bちゃんに聞きました。

「ねえ、大人になったら、どこの国に行きたいの。」

すると、Bちゃんは、

「タイの国だよ。あなたとお姉さんも
行ったことがあるから。」
と言いました。Bちゃんが、こう続けまし
た。

「私が行くときには、あなたとお姉さんも
来てね。ガイドをしてもらいながら、タ
イの国を回りたいからね。」

私は、
「はい。」

と元気いっぱい答えました。とてもうれし
かったです。

六年生になると、C君が言いました。
「タイ語を書いてみて。」

私は、
「いいよ。」

と言って書くと、それを見たC君は、
「すごい。大学に行つて外国の勉強をした
ら、たぶんあなたは、いい成績をとれそ

うだね。」

と言つてくれました。私は、そうなつたら
いいな、いっぱい外国のことを学びたいな
と思いました。

私は、みんな、外国のことを知りたいと
思っているんだな。外国のことをきらいと
思わないで、私といっしょに楽しそうに言
葉を勉強してくれてうれしいなと思いま
した。

私は、大人になったら、父の生まれた日
本と母の生まれたタイの両方の国でかつ
やくできるような仕事をしたいと思つて
います。

大好きな祖父と祖母

小 六

となりの町に住む私の祖母は、私が保育園のときに、心臓の動きが悪くなり、ペースメーカーを胸に入れる手術を受けました。それまでは、とても元気で、私と買い物に行ったり、旅行に行ったりしていたのに、その機器がないと心臓が止まってしまふと聞いて、とてもショックでした。

私はその当時、病院へよくお見まいに行きました。祖母はとても喜んでくれたけれど、入院している人の中には体中にチューブがついてねたきりの人や、認知しように大きな声を出している人がいて、小さかった私は、こわくて苦手でした。

その私が変わったのは、祖父が三年前に肺ガンで亡くなったからです。病状が進むにつれて、歩けなくなり、自分のことができなくなりました。祖父はいつも、「こんな体になって、情けない。」と言っていました。私はそれからお見まいに行くたびに、祖父のお手伝いをすることにしました。

「起こしてくれる？」
とたのまれれば、ひよいっとベッドの上に乗って、両手を思い切り引っぱって起こしたり、布団をかけてと言われれば、

「このくらいでいい？」
と聞きながら、かけたりしました。飲み物をわたしたり、歯ブラシを取ったりなど、私ができることは、お手伝いをしました。祖父は、

「おじいちゃん専門の看護師さんだね。」

「ありがとうね。」

「いつも喜んでくれました。私も祖父のお手伝いできて、とてもうれしかったです。入院していた人も、きつと祖父と同じ気持ちで、自分で自分のことができなくなり、くやしかったんだろうなと思いました。」

祖父が亡くなった後、心臓の悪い祖母が、去年の四月に腰を骨折しました。今、少しは歩けますが、車いす生活をしています。やはり、誰かの助けを借りないと、生活できません。母は一日おきくらいに祖母の家に行き、私は毎週土曜日に、家族と夕食を食べに行きます。そして、トイレについて行ったり、薬をまちがえないようにお薬カレンダーに入れたり、戸じまりを見たり、ときどき草むしりを手伝ったりしています。

祖母は、私と話すのが大好きで、私は学

校の話をたくさんします。すると、

「あなたが来るだけで、おばあちゃんは元気になるよ。ありがとうね。」

と言ってくれます。ありがとうと言うのは私の方です。私が赤ちゃんのころは祖母がベビーカーをおして散歩したり、いろいろな所に連れて行ってくれたりしました。今度は、私が祖母の車いすをおして、散歩に行ったり、買い物に行ったりする番です。

老人ホームに勤めている父は、

「誰でも年をとるのだから、お年寄りが困っているときは、助けなければ、自分のときには助けてもらえないよ。いいことをすると、きつと自分に返ってくる。」

とよく言います。

私は六年生になって、総合的な学習の時間に高れい者疑似体験をしました。足におもりをつけたり、ゴーグルをしたりしたの

で、特に階段を上るときや立つときは足が直角にしか動かせなくてとても大変でした。祖母はいつもこんなに大変な思いをして暮らしていると知って助けたい気持ちになりました。

祖母には、いつまでも元気でいてほしいので、私ができることは、お手伝いしたいと思います。そして祖母だけではなく、困っているお年寄りがいたら助けたいと思います。

小さな命

中 一

「あつ、また大人の手で小さな命が失われてしまったんだ。」

テレビから幼児が虐待され、亡くなってしまったニュースが流れてきた。このニュースを見ながら私は二つの出来事を思い出した。

一つ目はスーパーでの出来事だ。

「ママ、ごめんさい。」

と、スーパーに入った私の耳に、三歳くらいの子が泣き叫んでいる声が入ってきた。その声の方を見ると母親にすがりついて泣いている子供が目に入った。私は何事かと、目を見張った。

「うるさいんだよ。ついて来るな。」

と怒鳴りつけると子供を突き放し、振り向きもせずスーパーを出て行った。子供は慌てて母親を追いかけて、スーパーを出て駐車場に飛び出していった。車にぶつかってしまわないかと心配になり子供の後をそつと追いかけて行くと、母親は振り向きもせず車に向かっていく。その様子に腹立たし

さを感じた。子供が親に追いつくと子供に何やら怒鳴りつけ、背中を思いつきり叩くと車に乗せて走り去って行った。あの子は家に帰ったあと、だいたいじょうぶだったのかと心配した。

二つ目は、三歳の子供がうさぎ小屋の中に入れられ、食事は二、三日に一回しか与えられず、三か月後に亡くなってしまったという事件だ。うさぎ小屋の中からどんな思いで親のことを見ていたのだろう。悲しくて、不安で、辛くて、怖くて：どんな言葉でもその思いは書き表すことができない。

児童相談所に寄せられる相談件数は、この二十四年間で八十倍に増え、一年間で虐待によって亡くなる子供は五十人に及ぶという。この数字は一週間に一人の子供が亡くなるということを表している。私が中学校で友達と勉強や部活を行っている間にも、消えていく小さな命があるのかと思うとたまらない気持ちになる。希望や夢をもってこの世界に誕生する、輝く全ての命は、皆平等に守らなくてはならない命なのだ。それなのにこんなに悲しい形ですぐに亡くなってしまふ命があつてよいのだろうか。

このことにより、小さな命を守るために私は二つのことを考えた。

一つ目は、これから親になる大人たちに、命の大切さをもう一度しっかりと伝えるということだ。ゲーム社会で大人になった人たちは、人の命の大切さを本当に理解しているのか、改めて考えるべきであると思う。

二つ目は、幼児は大人の思うようにいかないことがたくさんあるということだ。時には泣き続け、時にはわがままだと言って言う。しかし、どんなに小さな子供でも考えがあり、心があり、感情があるのだ。幸せに生きていく権利のある一人の人間であるということをしつかり伝えたい。

私はまだ中学一年生のため、幼児虐待をなくす力はない。しかし、中学生という立場で、幼児虐待にあっている子供たちを救うために、身近な人との関わり合いから、何か働きかけることはできないか考えた。もし私の周りに体にあざがあったり、元気がない人がいたりしたときには、そっと声をかけたい。そして、虐待をされていたら相談にのり、信頼できる大人に伝え、虐待を防ぐことを働きかけていきたい。なぜなら、虐待連鎖といっ

て、虐待を受けていた子供が親になると、今度は自分の子供を虐待してしまうことがあるからだ。しかし虐待を受けているときに声をかけて力になってくれる友人や信頼できる大人がいれば、心の傷はいやされて、虐待連鎖を断ち切ることにつながるのではないかと私は考える。幼児虐待をなくすのはとても時間のかかる大変なことではあるが、積極的に働きかけていきたい。そして将来は、一つでも多くの命を救い、守り育む社会を築ける力のある大人に私はなりたい。

母から学んだ思いやり

中 一

私の母は介護施設で働いている。母が私たち姉弟を育てるために、長く続けられる仕事として介護職についたのだ。

介護の学校に通っている間、教わる内容は、とても楽しいことであつたり、前向きな内容であつたりしたという。施設に就職した母は、学校では学べない本当の介護に向き合うことになり、楽しさだけではない、様々なことを学んでいるようだ。母の働く施設は、比較的、重度の病気の方や経管栄養といつて鼻から管を入れたり、おなかに直接穴を開けて管から栄養を入れたりしながら生活をすすめる方々が多いそうだ。

母が仕事を始めてまもなく、男性の方が入居してこられた。入居されてすぐ、オムツから水のよくな便がたくさんもれてしまい、ズボンまで汚れてしまった。母は優しく声をかけをしながら、着がえとオムツ交換を始めた。するとその方は、涙を流し、

「申し訳ない、情けない。」

と小さな声をふりしぼっておっしゃった。母は、胸がしめつけられるような気持ちになったそうだ。それからしばらく便のときは、悲しそうな表情をされていたが、介護をするうちに、毎日の会話を通して笑顔が増えていったそうだ。そのことが母はとても嬉しいと言っていた。

年をとつても、男性は男性、女性は女性である。はずかしいと思うことは、なおさら人には見られたくないものだ。

介護は、相手の方がどんなに体が不自由で動けなかったとしても、人とのコミュニケーションが大切なのだと思つた。母は、「何かをしてあげる」のではなく「お手伝いさせて頂いている」気持ちを持ち続けたいと言っていた。

体を動かすことが難しくなつても、人として尊敬し、一つ一つの動作に思いやりをもたなければならぬ。また、病気による体の痛みで苦しんでいる方に対しては、薬だけではいやせない心のつらさもお話することや、手や体をさすることで、ほんの少しでも楽になるように心がけているという。そして、声をかけてもほとんど反応の見られ

ない方にも、働いている人は皆必ず声をかけ、窓の外の天気や楽しいニュースの話、ご家族が来られたときの話などをしていそうだ。それは特別なことではなく、必ず声が届いていると信じているから、普通に行われているということだ。

私は病気で体が動かなくなり、十数年も意識があることを気付いてもらえず、冷たい言葉や扱いをされていた人のことをテレビで観た。どんなにくやしく、悲しく、こわかっただろうと思いい涙が出た。だから母の話が本当に嬉しかった。

私たちを守るためのついた職業ではあるが、「本当にたくさん自分のためなところを気付かされたり、人生の勉強になったりすることがたくさんある。ママは、あなたたちにも施設の人たちにも本当に感謝してるの。」

と、言っていた。すごく疲れた顔のときもある。心配になるときもある。楽しい話をたくさんしてくれるが、きつと大変なこともたくさんあるのだからと思う。私も別の施設に見学やレクリエーションに行ったことがある。笑顔がいっぱい介護の大変さやお年寄りの体のつらさは、そのときはわからなかった。でも、みんなが笑顔になるよ

うに思いやりをもって介護する人がいるのだと気付かされた。

そして、母が一番心に残っている話を初めて聞いた。とても小柄で、耳が遠く、ほとんどこちらからの声は聞こえなくなっているおばあちゃん。言葉もあまり発することはなかった。見た目かわいらしいので、敬語もなく話している人も多く、「かわいがられている」という感じだった。ある日、部屋で近くに寄って話をジェスチャーつきでしていると、ぎゅっと抱きしめ、母の背中をとんとんして、頭とほっぺたをなでた後、

「あなた、いい子ね。」

と、言ってくれた。仕事を始めたばかりで少し疲れていた母は、涙が出そうになったそうだ。そして、間もなくその方は亡くなった。背中をとんとんしてくれた手は、間違いなく、とても「大人」で、ほっぺたをなでくれたその手は、とてもあたたかく大きく感じたそうだ。悲しいお別れもあるけれど、とても大切な思い出もたくさんもらっている、とこの話をしてくれた。

今年の母の誕生日に手紙を書いた。

「お母さん、いつもありがとう。大好き。」

災害時の人権問題、差別について

中 一

今から三か月前、熊本で大きな地震がありました。その後も強く大きな余震が何度もあり、みんな大変な思いをしたと思います。

私も五年前、同じ経験をしました。二〇一一年、三月十一日、午後二時四十六分頃起きた東日本大震災。私はまだ小学一年生で、何が起こったのかわかりませんでした。電気や水道はすべて止まり、地震で物が倒れる音しかしませんでした。ただただ怖くて震えていたことを覚えています。

また、次の日には原子力発電所の事故の影響で、原発から六キロ圏内にあった私の家は、埼玉県の体育館に避難することになりました。しかし、体育館はどこも人でいっぱい、入れるところはなかなか見つかりません。その後も不安な気持ちのまま、バスで体育館を探し続けました。まるで暗闇の中へ突き進むように。

そのときです。バスの中で一人の赤ちゃんが泣きだしてしまったのです。私たちも苦しくて辛く

てたまらなかつたのですから、小さな赤ちゃんなら、なおさらでしょう。ところが、一人の男の人が、

「ああー。もう、うるせえな。女なんだからたまらせろよな。」

と言いました。赤ちゃんのお母さんは、皆に頭を下げてあやまりながら赤ちゃんをあやし続けています。その背中が、小刻みに震えているように思えた。

私はその男の人の冷たさに腹立たしさがこみあげてきました。特に「女なんだから」という一言が頭から離れませんでした。女というだけで、男の人からそんなひどい言い方をされてしまうのか。赤ちゃんが泣いてしまうのは女性のせいではないし、男性だってあやすことはできる。それに、こんな状況で赤ちゃんが泣いてしまうのは当たり前でしょう、温かい目で見てあげなくてはいけないんじゃないの、と思いました。

今も避難所では、このようなことを言われている女性がいます。震災で皆が大変なのだから、「女性だから」と言われることがなくなっただけ、皆で支えていってほしいと思っています。

避難所では、食べ物は一入一つおにぎりが配られるだけ、また布団は一家族に二枚しか配られませんでした。まだ三月の体育館では、布団二枚では寒いし、おにぎり一つではお腹がすきます。また、施設や物にも限りがあり、特に困ったのがトイレです。一時間近く並ぶ行列ができることもありました。だからトイレをがまんする女性、水をひかえて体調をくずす女性がたくさん出るので、着がえも女性の大きな悩みでした。家族にタオルでかくしてもらったり、車の中のような狭い場所で着がえたりする人もいました。

避難生活で大変なのはもちろん女性ばかりではありません。けれど、「女性だから」大変なことでもたくさんあったのです。だから、災害時は女性や子供、お年寄り、病人、それぞれにあった支援を、なるべく早く行くってほしいと強く感じました。

福島の被災地では、いまだに電気や水道も通っていない所があります。元の家に住めず困っている人もたくさんいます。原発をどうするのか、どうなるのかの方向性もまだまだわからないままです。それなのに「被災者」というだけで差別されている人もいます。

「この県民じゃないんだから。」

「被災者は被災地に帰れよ。」

などと、たくさん差別をされている人がいるのです。なりたくて被災者になったわけではありません。帰れるものなら帰りたいたいのです。どこの人でも同じ人間にかわりはないでしょう。これからそういう差別をされる人が少なくなるように、いえ、無くなるように願います。

熊本では、今でもたくさんの方が避難所で生活をしていきます。辛い思いを背負ったその人たちが、少しでもいやな思いをすることがなくなるように、国や県の人たちにも女性が安心して着がえができる場所を増やす、トイレの数を増やす等避難所を充実させる活動をしてもらえたらと思います。また、赤ちゃんが泣きだしてしまったりときは、女性も男性も関係なく、皆で泣きやむように赤ちゃんをあやし、支え合っていく、それが当たり前だと思えるような国になってほしいと思います。

最後に、私は自分自身が大きな地震を経験したこと、毎日常家の布団で寝ることができ、ことがとても幸せなのだと思うようになりました。今

回、地震のあった熊本の人たちが、少しでも早く普通の生活に戻るように、食べ物や洋服などを提供する、節電に協力して無駄な電気を使わない、ボランティアがあれば参加して、熊本の人たちの助けになる活動を行っていききたいです。

一足のくつで一つの笑顔

中 二

私は今年の春休み、初めて海外へ行った。場所はミャンマー。「なぜミャンマー？」と思う人も多いだろうが、私たち家族は発展途上国と呼ばれているこの国を選んだ。

きっかけは、新聞に載っていた「ミャンマーの子供にくつを届けよう」というボランティア募集の記事。くつを持って、真っ白な歯を見せながら笑っている子供たちの写真が、私の目と心を離さなかった。

ボランティアの代表の方は、フィリピン旅行時、スラム街で「マネー」と言いながら集まってくる裸足や裸の子供たちを見たそう。屋外を裸足で生活していたら、当然けがをしやすいし、衛生的とは言い難い環境で破傷風になり、命の危険にもつながるだろう。その光景に衝撃を受け、子供たちに対して自分にできることはないかと考えている時に、五輪金メダリストの高橋尚子さんがアフリカの子供たちにくつを贈る活動をしていること

を知り、これなら私もできると思い、このボランティアを始めたそう。

すぐに電話をかけ、私たちは、活動の第一歩である全国から集まったくつや文房具を仕分けする作業に参加させて頂いた。

しかし、待っていたのは、私が想像していた優しい心だけではなかった。絶対に使えないであろう短い鉛筆。黄ばみやしみのある破けた古いノート。壊れた鉛筆や、使いかけの消しゴム。さらにはゴミまで同封された段ボールもあった。

おそらく「貧しい国なのだから、こんな物でも喜んでもらえるだろう。」という思いなのだろう。当然、心のこもった物もたくさんあったし、中には活動を応援する手紙まで添えてくださる人もいた。その気持ちもわかるが、複雑な気持ちになった。

仕分け作業から約一か月。私は日本を飛び立ち、ミャンマーの空港に立った。聞いたことのない言語が飛び交う中、周りを見渡すと私たちとは違うはだの色をした人ばかりだった。改めて、外国に來たと実感した。

私たちは滞在中、二つの寺を訪問した。ミャン

マーでは、寺が学校や孤児院の機能を果たしている。それも、無料だ。この国は仏教への信仰がとて厚く、誰もが寺にお布施を行っており、それを財源としていた。

到着してすぐに寺の中にある学校や孤児院を見学させて頂いた。学校といっても壁のない青空教室もあった。孤児院の中は、一人一畳ほどのスペースの板の間で、何十人もの子供たちが生活していた。

次に私たちは、寺の子供たちとの交流活動として、なわとびや綱引きを行った。日本の文化を知ってもらうために、特技である空手の型を披露し、指導する時間もいただけた。ミャンマーの子供たちは終始笑顔で接してくれ、言葉は通じなくても、一緒に体を動かすことで、国を越えた友情が生まれたように感じ、本当にうれしく思った。

日本と比べると、決して豊かではない環境の中、両親と離れて暮らしているにも関わらず、太陽のような笑顔でたくましく働き、学ぶ姿に胸を打たれた。

日本から贈られたくつと文房具を段ボールから出していると、寺の子供たちが好奇心で目を輝か

せて集まってきた。見ぶり手ぶりで足のサイズに合ったくつを一緒に選び、新品の文房具を手渡すと、はにかむような笑顔で受けとり、友達の中に走っていき、はしゃいでいた。

そして、さらに驚いたのは、ボランティアの代表の方が、寺の責任者の僧侶に、

「この活動がご迷惑になっていませんか。」

と尋ねたことだ。自分たちが良かれと思っただけでも、相手にとってはそうでないこともある。先に書いた使い古しの文房具のような、独りよがりの偽善にならないように、そして相手の尊厳を傷つけることがないように、常に配慮しながら活動が続いているのだと知り、日々の生活の中でもその思いを忘れてはならないと痛感した。

新聞記事を目にするまでは、発展途上国の子供たちのためにできることが私にあるのか、などと考えたことがなかった。どこか遠くのことだと、知ろうともしなかった。

今回の経験から私は、世界の子供たちのために、現地には行けなくても、「今、誰かのためにできること」があるのだと改めて感じた。

まず私ができるのは、周りの人に伝えることだ

と思った。個人にできることはほんのわずかなことだから、意味がないと感じる人もいるだろう。だが、力になろう、できることはあるかな、という一人一人の気持ちがあれば大きな力となり、世界の子供たちの笑顔と人権を守ることができるのではないだろうか。

「一足のくつで一つの笑顔」

この言葉を、少しでも多くの人に広めていきたいと思う。

障害のある人と共に生きる

中 二

皆さんは、「障害のある人」という言葉を聞いて何を思い浮かべますか。良いイメージをもっていますか。それとも良くないイメージをもっていますか。

私に通っていた小学校の敷地内には、障害のある人や、日常の生活に何かしらの支障がある人などが通う学童施設がありました。私よりも小さい子供から、高校生くらいの人まで通っていました。一、二人の子供に対して必ず指導員の方が付き添っていて、障害のある人について何も理解していなかった私は、この子供たちは一人では生活できないのだと思い、心の中で差別していました。しかし、その一方で同情している自分もいて、障害のある人を見かけると「かわいそう」「大変だな」といった言葉しか思い浮かびませんでした。そのようなことを考えながら、子供たちが遊ぶ姿を眺めていました。しばらく見ていると、一つの疑問が浮かんできました。それは、全員が笑顔で楽し

そうにしていたことです。車いすを使っている子、一人では歩けない子も上手に話し、性別、年齢関係なく遊んでいる様子は、私たちと全く変わりませんでした。今まで一方的な見方をしていて、差別や同情をしていた私は、やっと自分の勘違いに気がきました。

なぜ私は障害のある人に対してこのような差別意識をもってしまったのか。なぜ差別は生まれ、そして無くならないのか。この二つの問題には共通する原因があると思います。それは「思い込み」です。普通に生活していれば、たくさんの情報が次々に入ってきてきます。その中で、無意識のうちに自分にとって都合の良い情報や正しくない情報を信じてしまうのだと思います。噂の波に流されずにしっかりと正しい情報に基づいた自分の意見をもたなければいけないと感じました。

私たちの思い込みが原因の事件は数え切れないくらい起こっています。その中の一つに、私自身悲しい気持ちになります。とても驚いた事件がありました。それは電車内で、顔に障害がある女性の写真を、一人の女子高生がSNSに投稿したという内容のものです。この女子高生は「顔に障害があ

ることが面白い」「何をしても良い」と軽い気持ちで投稿したのだと思います。しかし、障害があるだけで、自分の顔がインターネット上に流れたと知った被害者の気持ちはどうでしょうか。結局、女子高生は書類送検され、被害者と加害者、このニュースを見た人、誰も幸せにならない事件でした。私はこのような事件が起こる度に考えます。誰が、何のためにこんなことをするのかと。きっと、弱虫な人が自分を強く見せるために、自分を守るためにやるのだと思います。いじめだって同じです。自分がいじめられないように、他の人をいじめます。絶対にこんなことをしてはいけません。しかし私たちが少しずつ加害者側に揺れ動いていることは事実です。そのせいで、障害のある人を差別する社会になりつつあるのではないのでしょうか。

「差別社会」はすぐには変えられません。でも、それぞれができることをすれば、いつかは変われるはずです。まず最初に、自分が差別をしないことです。周りを変えるには、自分から行動しなければ変わりません。だから私は差別をなくし、世界を平和にするためにやってみたいことがあります。

す。それは「青年海外協力隊」という仕事に就くことです。世界の様々な国に住む人と同じ暮らしをし、触れ合うことで何か新しいことが見えてくると信じています。そこから私は、人と人をつなぎ、世界中の困っている人を助けたいです。その夢を叶えるためには、周囲の人のことを思いやる気持ちや、どのように接するべきかなど考えなければいけないことがたくさんあります。でも、まずは身近なところに目を向けて生活し、差別を世界からなくす、という大きな目標に向かって歩んでいきたいです。いつか、どんな障害のある人も笑顔で暮らせる世の中になりたいです。

障害

中 二

みなさんは、障害のある人を見てどんな行動をとっていますか。私は、人権作文とおして今までの行動を振り返ってみようと思い、このテーマについて考えてみました。

ある日、私が家族と出かけたときのことです。移動には電車を利用して行きました。次のお店に行こうと電車に乗りました。するとそこには、目が不自由でつえをついている女の人が立っていました。その方の前の席には、高校生くらいの男の人たちが二人で座っているのが見えました。私は、その場所から少し離れているところに立っていました。しばらくして電車が動き始めると、その女の人揺れに耐えられず、ふらふらしたり、かばんを周りの人にぶついたりしていました。そのかばんは、大きな声で話をしていた高校生たちにも当たってしまいました。すると、高校生たちは女の人の顔をにらむように見ていました。やがて楽しそうに話していた高校生たちの声も鋭くささる

ような悪口へと変わっていききました。わぎとなのか、女の人に聞こえるような大声でした。少し離れていた私たちにも、それは聞こえてきました。

「目が見えないから人にかばんを当てても謝らずに知らん顔できるんだよな。」

「目が見えないなら電車なんか乗るなよ。」
といった言葉でした。心ない言葉に女の人は何も言えず、下を向いてじっとしていました。どうして、女の人は何も悪いことをしていないのに、責められなくてはいけないのだろうかと思っていると、それを見ていた近くの男性がすつと立ち上がり、女の人に席をゆずっているのが見えました。女の方は、深く頭を下げて何度もお礼を言っていました。席をゆずった男性は、違う車両へと移っていきました。

私が電車を降り、駅のホームを歩いていると、私が乗っていた車両の一つ前のところに男性は立って乗っていました。私は、男性がとった行動に感動しました。自分だったら、絶対に勇気がでなくて、席をゆずれなかったと思います。そう考えると、とても恥ずかしく、情けない気持ちになりました。

後から私は、母に言われました。

「困っている人を見かけたら、声をかけないことには何も始まらない。自分にできることであれば手助けをすることが大切だと思うよ。」

その言葉は、何もできなかつた私に助け合うという大切さを改めて教えてくれました。今まで何もせず、ただ見ていただけの自分を変えていかなくてはいけないという気持ちと同時に、自分の中にその勇気があるだろうか、不安な気持ちになりました。

これから私たちが成長していくにつれて、いろいろな世界を知り、障害のある人たちに出会うこともあると思います。そういったときに前と同じように見て見ぬふりをせず、声をかけて、手助けができるようになりたいです。思いきって声をかけられる人になりたいです。一人一人が助け合い、支え合っていけば、障害のある人も安心して過ごせる環境ができると思います。誰もが同じ人間であり、平等に過ごす権利があります。みんながこのようなことを意識して生活し、住みやすくなっていけばよいと思います。

神様からのおくりもの

中 二

皆さんは、「知的障害」という言葉を知っていますか。私の妹は小学校二年生のときに知的障害だということがわかりました。知的障害とは、読み書き、計算など日常生活や学校生活を送るうえで、頭脳を使う知的行動に支障があることです。

私の妹は、幼稚園の年長までは少し遅れているくらいだろうと思われていました。けれど、他の友達はできているのにあまりにも遅れていることがわかりました。妹が年長のとき、私は小学校三年生でした。母と父は、私を心配し、

「違う学校に入学させようか。」

と、言ってくれました。けれど、私は妹と一緒に学校へ通うことをとても楽しみにしていました。私は、母と父にすぐ、

「嫌だ。同じ学校に行きたい。」

と、自らお願いしました。母と父には、私からそんな言葉が出るとは思わなかったと言われました。妹と私がきちんと気持ちを伝えたことで、同じ

学校に通えるようになりました。それでも母は、妹の入学までの間、通常学級にするか特別支援学級にするかを悩んだそうです。そして、母は一年生の間だけ様子を見ることを決め、妹は通常学級に通うことになりました。

楽しい学校生活を夢見ていましたが、私にも妹自身にも、予想していたものよりとてもつらいことが待っていました。妹は、学校で教わる勉強の計算、ひらがなやカタカナを理解することができませんでした。そこからきたストレスで学校が嫌になり、私に当たったり、けんかをしたりのようになってきました。また、妹は元気で人が大好きな子供でした。ただ、人との距離感が上手につかめないため、周りの子たちから、

「妹にけられた、たたかれた。」

などと、よく言われるようになりました。妹と同様、私もストレスがたまり、妹にやつ当たりをしたり、けんかをしたりすることが続き、とても暗い気持ちになることが多くなりました。

しばらくそのような日々が続く、私は五年生に、妹は二年生になりました。母が私と妹のことを考え、妹はその年から特別支援学級に通うことにな

りました。妹は毎日嫌で行きたがらなかった学校が、少しずつ楽しくなり始めていました。特別支援学級は、一クラス五人から七人くらいしかいなかったため、その子に合った勉強内容などを教えてくれ、妹にとっては、毎日が楽しい学校生活に変わっていったのです。妹は前よりずっと明るく元気になりました。そして、妹のことをわかってくれ、信頼できる友達、親友もできました。私にとっても家族にとっても、はじめは不安しかない特別支援学級でしたが、今は本当に特別支援学級にして良かったと思っています。

私の家族は、妹が生まれてくれたことに感謝しています。私たち家族は、妹のような障害のある子は、神様が「この人たちならしっかり育てられる」と考え、私たちのところへ授けてくれたのだと思っています。私は、妹を通して知的障害のことを知るまで、体が不自由な人などを差別してしまったことが、自分で意識していなかったとしても、態度に出ていたことがあると思います。しかし、私は妹の辛さを知り、勉強などがついていけない人も、体や目や耳が不自由な人も、「みんな一生懸命に生きている。周りの人と同じように、周

りの人以上に努力をしているんだ。」ということから理解することができました。私は、二度と差別することはなくなりました。世の中で今までに差別したことがある人は、多くいることでしょう。でも、私と同じように、きつとだれでも変わることができるはずですよ。妹と私の話を通して、多くの人が変われるんだということを伝えたいです。そして、変われることを気付かせてくれた妹は、神様からのおくりものです。

私たち家族は、これからもずっと、ずっと仲良くしていきたいです。

偉いことが当たり前になる世の中へ

中 三

僕には障害がありません。しかし、これから先どうなるかはわかりません。このことは僕も含め、みんなに言えることです。

高齢化社会が進んでいる今、高齢になるにつれて体の自由がきかなくなる人が増えています。街を歩いていると目の不自由な人や足の不自由な人など、体に障害のある人を見かけます。その時僕は、体にかかる負担は大きいのではないかと考えます。街中の道路にあるほんの小さな段差でも、障害のある人から見ると体力を奪う、とても大きい段差なのかもしれません。

先日、僕の親が腹部の手術を受けるために入院しました。そして、無事に手術を終えて家に帰ってきました。そのとき、帰りに利用したバスの中にある段差一段一段がとても疲れると言っていました。それから数日、僕の親は自転車通勤するのが困難なためバスを利用していましたが、その度にあの段差は疲れると言っていました。足を手

術したわけでもないのにあの段差を越えるだけでとても疲れるというなら、足に障害のある人が同じようにバスを利用したら更に負担がかかると思います。

また、僕は、街中で目の不自由な人を見かけたとき、その人は日常の中で様々な苦勞をしているのではないかと思ってしまう。なぜなら、もし僕の目に重い障害があったら周りのものが何も見えないので、僕はそこにいるだけで不安を抱えてしまい、次の一步を踏み出すことができないと思うからです。

その他にも何らかの障害がある人は日々の生活の中で様々な困難と向き合っているといます。そして、その困難を少しでも小さくするために必要なことは、周りにいる障害のない人の助けです。

しかし、障害のある人たちはその助けを常に求めているわけではありません。本当に困っているときに助けることこそが本来の人助けだと僕は思います。障害のある人をたくさん助けることは良いことですが、過剰なのは良いことではありません。障害のある人も自分の力で成し遂げたいことがあります。できることも手助けしてしまっ

障害のある人たちがそれを達成したときの喜びを奪ってしまうのと同じことです。そうしないために周りにいる人たちが気を付けなくてはいけないことは、相手の気持ちを考えて行動することです。例えば、駅で出口に向かっている目の不自由な人を見かけたとき、その人をサポートしようと声をかけるよりも先に体に触れてしまうと、触れられた人は急な出来事に驚いてしまいます。これは、サポートする側が相手の気持ちを考えずに行動してしまったがために起きる出来事です。このことから、サポートをする人に大切なことは相手の気持ちを考えた上で行動することだといえます。そこで間違えてはいけないのは、障害のある人を助けるということは偉い、と勘違いしてしまうことです。つまり、誰かをサポートするということが当たり前の中の世になれば、障害のある人も周りへの気遣いや不安を抱くことなくどこにいても安心して行動できると思います。僕はこの作文から障害の有無の前に、僕たちは一人一人の人間だということをみんなに改めて理解してほしいです。

これから先、僕はおそらく障害のある人と関わ

る機会があります。その時、積極的に声をかけ、その人の役に少しでも立ちたいです。

僕は以前、伝統というものが自分から周りの人に、そしてその次の世代に受け継がれることで初めて成り立つのだと学びました。だから、僕の行動を誰かが見て、その次の世代につながるのだとしたら、僕は率先して障害のある人の役に立ちたいです。その結果、障害のある人が周りからのサポートを遠慮なく安心して受けられるようになったら、サポートすることが当たり前の中の世の中に近づいたと言えると思います。また、これは一人一人の意識が何よりも大切です。これを読んだ人にそのことも伝われば、今は偉いことが当たり前になる世の中が更に近づくと思います。

おにぎり

中 三

私がまだ四歳だったとき、父親の転勤で、イギリスに行くことになりました。私は、外国に行つたことがなかったので不安でしたが、初めての外国なので楽しみでもありました。新しい友達はできるかな、英語は話せるようになるかな、毎日楽しく生活できるかな、と。

しかし、現実はそのなにごくありませんでした。まず、言葉が通じません。家族に父以外で英語を話せる人がいませんでしたし、イギリスに来てすぐに英語が話せるわけがないので、大変なことになりました。言葉が通じないことは、こんなにつらいものかと思いました。

数週間後、英語に慣れるため、私は現地の学校に行くことになりました。そして、そこで「差別」という壁にぶつかりました。

「お前は肌の色が違うから嫌だ。」

「英語を話せないのかよ。」

「お前が持つてくる弁当、気持ち悪い。」

肌の色が違うせいで仲間はずれにされ、英語を話せなくてばかりにされました。言葉はわからなくても、差別されていることはわかります。言い返したいことはたくさんあったのですが、言い返せない日々が続きました。

しかし、一か月くらい過ぎると、以前より悪口が減っていきました。クラスメイトは、アジア系の肌の色に慣れたようで、また、私も頑張つて英語の勉強をしたので、少し楽に生活できるようになりました。

一方、食べ物への偏見からくる差別はまだ続きました。私がお弁当に持つていった「おにぎり」が原因でした。自分にとっては普通のおにぎりなのですが、イギリスの子供にとっては、見たことも食べたこともない、気持ち悪い食べ物に見えたようでした。米を食べたことがないうえに、真っ黒い海苔やひじきを食べる私は、気持ち悪い弁当を食べる日本人という目で見られ、嫌がられているようでした。母は、

「そのうち慣れてくるわよ。」

と言つて、おにぎりを作つてくれましたが、時々、サンドウィッチを頼んだこともありましたが、時々

そんなことが続いたある日、
「君のお弁当に入っている物、珍しいから、食べさせて。」

と、一番仲良くしていた子が声をかけてきました。私はびっくりしました。彼のおじいさんが日本好きだと後で聞きましたが、そのときは、好奇心と、それ以上に勇気のいる決断だったでしょう。

私は迷わず、彼にお弁当箱の中のおにぎりを分けてあげました。何て言われるか、食べてくれるか、どきどきしましたが、おにぎりを初めて一口食べた彼は、

「おいしい。もっと食べたい。」
と言ってくれたのです。

「本当に？おいしい？」
私が思わず聞き返すと、
「うん。」

と、にこにこして答えてくれました。味も自分もほめられた気がしました。二人で食べたおにぎりは、あつという間になくなり、

「もう、ないの？」
と言われるほど、本当に気に入ってくれたようでした。その時のうれしさ、一緒に食べたおにぎり

のおいしさは、今でもはっきりと覚えています。大げさかもしれませんが、自分という存在を認めてもらったような気持ちでした。

それから、私に対する差別は少なくなってきました。他にも、おにぎりを食べてみたいと言う子も増え、それまで嫌だったランチタイムが、友達との楽しい時間になりました。

世界には多くの民族がいて、生活習慣が違い、宗教による食文化の違いもあります。当然、異文化と出会ったときは、驚いたり、理解しにくかったりすることもあるはず。私も、逆の立場ならどうだったでしょう。年齢にかかわらず、偏見をもつことがあるかもしれません。今は、日本を訪れる外国人観光客や日本で働く外国人も増えています。お互いに偏見を持たずに、文化を尊重し合いながら、対等な立場で接点を見つけていくことが大切だと思います。また、相手とわかり合える言葉を身に付けることも必要だと、経験から学びました。

「おにぎり」のことを「おむすび」とも言います。私とイギリスの友達を結びつけてくれたのが「おにぎり」だったと思います。

大切なメッセーヂ

中 三

あなたにとって「大切なこと」とは何ですか。「大切なこと」と聞いて、何を思い浮かべますか。

私には、いつも笑顔で、明るい祖父がいました。そんな祖父は人に厳しい人でした。しかしそれ以上に、自分に厳しい人でした。何事にも真つすぐで一生懸命な祖父が私は大好きでした。

祖父は四年前、私が小学六年生のとき病にかかり、入院生活を送っていました。最初はいつものように明るい祖父でしたが、次第に体が上手く動かせなくなり、食べることも難しくなりました。ついには自分で呼吸をすることさえも難しくなりました。それは、「命のタイムリミット」を意味していました。そして、ある日の夜、

「もう、長くないみたい。」

母が一言、そう言いました。その言葉を聞いたとき、私はある言葉を思い出していました。それは、「病気なんてすぐに治してやる」です。この言葉は、まだ祖父が会話ができていたときに、力強く

言っていた口癖のような言葉です。その言葉を思い出したとき初めて、「なぜ祖父だったのだろう」と強く思いました。しかし、その疑問に答えなんて無かったのです。それから数日後、祖父は静かに息をひきとりました。お葬式では、棺の中に入った祖父を、涙ぐんだ顔で囲むようにして、みんなが見ていました。その姿を見て私は一人、あることを思い出していました。それは、祖父がまだ会話ができていたときにポロリと、

「ありがとう。」

と小さくつぶやいたことです。祖父は不器用な性格だったため、自分の思いを素直に伝えるのが下手でした。そんな祖父が小さくつぶやいた「ありがとう」という言葉に、どんな思いが隠されていたのか、私には分かりませんでした。でも、少しだけ分かったような気がしました。「いつも来てくれてありがとう。病気になってこんな姿になってしまった自分を、ここまで支えてくれてありがとう。」そう言いたかったのではないかと思いました。人が人を支えるということは見えないけれど、こんなにも人の心を動かすものなのだと思ふことができました。思い返してみれば、私自

身も、いつだって家族・友人に支えられてきました。苦しいとき、つらいときに温かく見守ってくれる家族、隣でそっと寄り添い、手をとって一緒に遊んでくれる友人。「支える」ということは決して当たり前ではなく、「奇跡」なのだと思います。そんな大切なことに気付かせてくれた祖父に、私はとても感謝しています。

これは、最近、私が母から聞いたことですが、祖父は生前、近所の人に、

「目が見えないのによく生きてられるね。」と、言われたそうです。

祖父は若いときから両目が見えず、たくさんの人に助けられながら生きてきました。祖父自身も周りの人に手を借りながらも、目が見えないということを言い訳にせず、周りの人と同じように生活を送っていました。祖父の姿を知っていた私は、そのようなことを言われたと知って、とても悲しく、そして悔しかったです。その言葉をどんな気持ちで聞いていたのかを考えると、胸が痛いのです。私の祖父は周りの人と何も変わらない人です。ただ、目が見えないだけです。たったそれだけなのに、そのようなことを言われるなんて、おかし

と思います。人間だれにも、それぞれ違いがあると思います。しかしその「違い」は「個性」だと思います。お互いがお互いの「個性」を認め合い、理解することが大切なのだと感じました。そして、それができたときに初めて、「支え合う」という関係が築けるのだと思います。

最後に、私はあなたへ伝えたいことがあります。それは、「周りの人の大切さ」ということです。もしあなたが、何かに困っているとき、苦しいとき、一度立ち止まって横を見てください。きっとあなたの横でそっと寄り添い、手を差し伸べてくれる人がいるはずです。きっといます。そのことに気付けたのならば、その人がいることを決して当たり前だと思わず、その人との出会いに感謝してください。きっとその出会いは、あなたにとってかけがえのない出会いとなり、かけがえのない存在になることでしょう。

私は、今日も明日も、これから、天国にいる祖父へ伝え続けます。「おじいちゃん、おじいちゃんのおかげで数々の大切なことに気付くことができたよ。私に大切なことを教えてくれて、ありがとう。」と。

世界の子供たちの人権について

中 三

人権――それは世界中で生きる全ての人々の生命が保障され、自由・名誉などを享受する権利だ。この権利があることで、私たちは生まれた瞬間から、当たり前前に「人」として生きることができている。しかし世界には、その当たり前前が当たり前ではない地域があるという現実がある。この現実を変えるために、私たちには何ができるのだろうか。

私が世界の教育事情について興味をもったのは、つい最近のことだ。きっかけは母の一言だった。「ランドセル、アフガニスタンに送ってみたい？」私はこの母との会話の中で、世界には教育を受けたいと願う多くの子供たちがいること、しかしその願いが実現されていないという現実を知った。私はこの現実に対し、疑問と怒りを覚えた。人権は、性別、年齢、人種問わず、生まれながらに私たちに与えられた、人として生きるための権利だ。相手を否定することや差別することは、決して許

されない。私たちには自由が与えられているからだ。ではなぜ、アフガニスタンの子供たちの願いは叶えられていないのだろうか。私はその答えを探した。

原因は二十三年間の内戦、教師や学校施設の不足、家庭の貧困だった。子供たちはどうすることもできず、ただこの現実を受け入れるしかないのだ。しかし私は、この現実から目をそらしてはいけなと思う。「仕方がない」という一言で私たちが片付けてしまったら、子供たちの自由を奪い、人権を無視することになる。私たちにはできることがあるはずだ。

私と母との会話の数日後、押し入れで眠っていたランドセルに使わなかったノートや鉛筆を入れ、アフガニスタンへ送った。六年間という月日を共に過ごしたということもあり、少し寂しい気もしたが、どんな女の子が使ってくれるのか、この一つのランドセルでどれほどの願いや夢を叶えることができるのかと考えると、とてもわくわくした。現在アフガニスタンでは、男子に比べ女子は学校へ通えていない。女性は六十八パーセントが文字を知らない。これには女子教育に対する理解が得

られないという文化的な背景もあるが、子供たちが男女関係なく教育を望んでいることを考えると、これもまた人権の無視ではないだろうか。

また、アフガニスタンでは、子供たちの「勉強がしたい」という願いや人権が守られていないことから発生している問題もある。大人になって家族ができて、自分自身やその家族の健康を守ることができないう問題だ。女性に比べ男性のほうが教育を受ける機会に恵まれていたとは言っても、男女とも決して満足な教育が受けられたわけではない。そしてそれが人の命に関わっていくのだ。女子にも小学校の初等教育六年間だけでも受ける機会があり、男女平等に紙とペンが配布されるようになれば、多くの命を救うことができる。そして、私たちにはその手助けができるのだ。日本からランドセルや紙、ペンが送られてくることで、貧困のために就学できなかった子供たちも、学校へ通えるようになったという。私たち日本人の優しさや思いやりが、子供たちの夢を叶え、人権を守っている。

私は今回、ランドセルを通して世界の子供たちの人権について考えた。日本では全ての子供が、

小学校、中学校の教育を受けることが義務づけられている。私はこの中学三年の一年間を終えると、全ての義務教育課程を修了することになるが、振り返ってみると、つらいこと、苦しいことも多くあった。きつと、全ての人がそうなのだろう。しかしそれでも私たちは幸せなのだ。そしてその知識を、世界の子供たちの夢や人権を守るために使わなくてはならないと私は思う。これからも、自分に与えられた環境に感謝し、人権が尊重される社会づくりへ貢献していきたい。

新たな自分へ

中 三

「くまモン、またね。」

可愛らしさに満ちた男の子の声に、
「またね。」

と手を振り笑顔を向ける僕がいた。その僕は、新たな僕だ。今までとは違う僕。そんな僕を大きく変えたきっかけがあったのだ。

四月十四日、夜九時二十六分、日本列島に大きな衝撃が走った。「信じられない。」この動揺にも恐怖にも似た感情が、僕の心を支配した。

この日、熊本を中心とした九州地方が震度七の大地震に見舞われた。その様子は、すぐさまテレビなどのマスメディアを通じて、僕の目に飛び込んできた。二階建ての住宅は、地震の衝撃で一階部分が倒壊し、見るも無残な状態になっていた。そして、家を失い、大切な友人や家族を失い、戸惑いと悲しみを隠せない熊本の人々の様子も映し出されていた。あの惨状は、一度見たら目に焼きついて、もう何とも言い表すことができない。そ

こには、「自分にはあまり関わりはない」という傍観者としての立場の僕自身が少なからず存在していた。しかし、そのような僕は、気付いたら存在を消していた。

僕は、東日本大震災を想起した。それは、「惨状」ばかりではない。むしろ、「人と人とのつながり」「やさしさをさしのべる人々」そのような温かな部分が多かった気がする。

僕にも何かできるのではないか、いや、何かできないのか、と考えた。そのとき、ふと生徒会本部のメンバーの顔が浮かんだ。僕一人では大したことではないが、学校みんなの力を借りればできることがあるのではないかと。そして生徒会本部において、「今、私たちにできることとあなたの笑顔のために」というプロジェクトを立ち上げた。僕たち生徒会本部は、熊本地震で被災された方々へ「何か力になりたい」「まずは自分たちから」という思いに駆られ、支援活動をはじめた。震災の現状を知るにつれて、いてもたってもいられなくなった。翌日には緊急で生徒会本部会議を開き、役員の仲間と具体的な活動を決めていった。そして、みんなの思いは一つになった。それが、

『せいがからつなげる　いのちのバトン　がんばろう、共に』

である。これは僕たちの中学校名「菁莪^{せいが}」からつくった支援活動のスローガンである。

会議の翌日、早速支援活動が始まった。こんなにも早く行動に移したのは、僕にとって初めてのことであった。お手製の募金箱と想いのこもったポスターを持って、募金の街頭活動を行った。駅前や農産物を扱うしらかおか味彩センター、そして母校の小学校。自分の学校の外での活動には、勇気が要った。最初は、先生や仲間にも声量で負けていて、上手く呼びかけができなかった。しかし、僕はここで思いきって大きな声をみんなと一緒に出してしてみた。そうすると、笑顔で近づいてきてくれるおじいさんやおばあさん、幼い子供たちがいたのだ。募金に協力をしてくださった方々から、

「頑張っつね。」

「宜しく願います。」

「福島の人に私も助けてもらったのよ。」

など、多くの温かい言葉をかけてもらった。何だか、僕が応援されているようで、とにかく嬉しかった。

小学校での活動は、一年生や二年生に熊本地震への募金活動のことが言葉では上手く伝わらなかった。そこで、生徒会本部のみんなまで思い付いたのが、「くまモン着ぐるみ作戦」である。僕は少しでも貢献したいという思いで、くまモンの着ぐるみをまとい、翌朝の募金活動へと向かった。すると、粘り強い声かけにくまモンの着ぐるみ効果が合さり、多くの協力をいただけたのだ。募金活動に夢中になり、楽しくなってきた。「喜んでくれたら」と思うと、活動の時間が短くさえ感じた。

僕は、熊本のみなさんへの支援活動を通じ、大切なものを学んだ。「今、私たちにできることゝあなたの笑顔のために」は、普段の生活でも言えることなのだ。いつでも相手の立場になって考えて行動できる人物でありたい。

「くまモン、またね。」あの男の子や協力してくれたみなさんへ伝えたい。「しっかりと熊本へ届けます。」と。心からそう思う。僕たちの活動に対して、僕の気持ちに対して、心が温まる手助けをいっぱいありがとう。そして新たな僕に気付かせてくれて、本当に感謝している。

言葉Ⅱ刃物

高一

「居ても意味がないんだから、居なくなればいいのに。」

「ゆうれい。」

これらは、刃となり、私の胸に刺さり、大きな傷跡を残した。いや、今も残している言葉です。

私には、小学生の頃、尊敬できる同級生の女の子がいました。彼女はスポーツが得意で、人前にも率先して立つことができ、私が苦手なこと、できるようになりたいと思っただけが、ほとんどできる子でした。行動力と発言力もあり、周りの友達を引き込むことのできる子でした。冒頭の言葉は、この同級生から言われた言葉です。このときから現在に至るまで、人と接しようとするとき、この言葉が頭から離れません。彼女は、私がこれ程までに気にかけるとは思いません。ただ思ったことを、つい口にしただけかもしれません。軽々しく口に出してしまった言葉が、時として人の心を傷つけ、その後の人生にも影響を与えてし

まうこともあるのです。

私は、「聞いた」ことで、とてつもない痛みを感じました。心をナイフで裂かれたようでした。悲しみに苦しくてたまりませんでした。なぜ、あのような言葉を簡単に言えるのか、なぜ人につけることができるのか、不思議に思いました。どうして周りに居るクラスメイトは、誰一人注意することができないのか、不思議でなりません。同調していたクラスメイトの内、一人でも注意してくれていたならば、少しは私の痛みと悲しみは和らいでいたかもしれません。「言葉Ⅱ刃物」、それを私の過去の経験で、思い知ることができました。今でもあの時の事は、思い出したくもない辛い思い出です。

今、私は高校生となり、顔や名前も知らない人たちがクラスメイトとなり、毎日を過ごしています。以前から「いじめ」が問題になっていて、毎年、四月は自殺者が増加し、その原因にいじめがある聞いたことがあります。とても心配でした。しかし、幸いなことに私のクラスではいじめはなく、逆に、たくさんの思いやりあふれる声かけができる人たちがばかりで、大変嬉しく思うのと同時に、

安心して生活が送れています。

「いじめ」とは、学校に限らず、いろいろなところで起こるものだと思います。そして、私のように、直接の言葉によるものもあれば、その他様々な「いじめ」と言われるものもあると思います。共通して考えられるのは、それがどこで起ころうと、どんなことであろうと、小さな積み重ねが、人を死に追いつめてしまうことがあるということです。「いじめ」で苦しみ、悲しい思いをする人が一人でも少なくなるためには、こういったことを皆が理解しなくてはいけないのだと思います。そして、人への「思いやり」や「感謝」の気持ちを強く持つことも大事なのだと思います。そして、お互いが「笑顔」でいられるような、そんな温かい言葉を皆がつかっていかれたらいいと思います。

私は、相手の気持ちを考えずに、心無い言葉をつかう人がいたら、注意できる人になりたいです。そして、自分自身「思いやり」を忘れずに、温かい言葉をつかっていきたいです。これから先の未来が、皆平等で、「いじめ」の無い思いやりあふれる世の中になれることを願っています。

社会と私

高三

「よし、中学から特別支援学校に通おう。」そう心に決めたのは小学校六年生の頃でした。

私が特別支援学校の存在を知ったのは、小学校の支援員さんのおかげでした。

小学校四年生の頃、自分の思うがまま行動できるクラスメイトと、少しずつ動けなくなってきた自分とを比べて、「何で自分だけ違うの」と、自暴自棄になってしまい、クラスメイトに会うのも嫌だと感じる状態になっていました。

そんな状態が二年くらい続いて、ようやく卒業の年となっても、私はまだ一步を踏み出せず、皆と同じ教室に入ることができませんでした。そのような時、支援員さんに、

「中学はどうするの。きっと地元の中学に皆は進むと思うよ。」

と言われ、私は目先の「明日学校に行けるかどうか」ということしか考えていなかったため、支援員さんの言葉にはっとしました。さらに、

「特別支援学校って知っている？ここは障害のある子たちが通う学校だから、もしかしたら分かり合える子がいるかもしれないね。」

とも言われました。私はそこで初めてそういう学校があるということを知りました。それを機に、今まで関わっていた社会とは別の新しい社会に踏み出す決心をしました。

晴れて入学式を迎えたとき、体育館にたくさん乗っている子がこんなにもたくさんいるのか。」と驚くとともに、私はなぜ今まで気付かなかったのか不思議に思いました。今、その理由を考えるとき、今まで私が外に出ようとしなかったことが原因で、無意識に車いすの子を自分に重ね合わせ、シャットアウトしていたからではないかと思えます。

入学式はとても不安でしたが、すぐに友達ができ、また学年活動や部活動ではクラス以外の子と関わるが多くなりました。はじめは、どうコミュニケーションをとったらよいのか分かりませんでした。が、中学二年生の夏にデイサービスに通うようになり、そこで私より年下の子や同学年の

子に話しかけてみたところ、会話はできないけれど、笑顔や声を出すことで私が話しかけたことに對して返事をしてくれることが分かりました。この経験から、寄宿舎や学校でいろいろな子に声をかけられるようになりました。また、デイサービスでは、職員さんと話しているうちに他の作業所の職員さんとも仲良くなれたり、人生経験豊富な話も聞くことができたりしました。

小学校六年生のとき、それまで生きてきた社会とは別の新しい社会に踏み出した私は、少し大きくなつたような気がします。もし、あのとき支援員さんに特別支援学校のことを教えてもらっていなかったら、私は自分と向き合うこともできなかったと思います。

一步を踏み出したことで、私に関わる社会が広がるというのを胸に、これからも多くの決断をしていこうと思います。

「自分らしさ」と「相手らしさ」

高三

「自分らしさ」とは一体どのようなものなのでしょう。私はこの作文を書くことを機に、人間の一人一人の個性の大切さについて改めて考え直してみることにしました。

私は人間関係において消極的になってしまふことがよくあります。一人になることを恐れて、誰かと関わる際には、とにかく嫌われないようにという考えが真っ先に思い浮かんでしまいます。そのため、本当はそうは思っていないくても相手の意見に合わせたり、愛想笑いをしたりしてしまいました。そのおかげで、私は人と言い争ったり、孤立したりすることはありませんでした。しかし、これは果たして正しいことと言えるのでしょうか。一人でいたくないからという理由で相手に合わせているだけの関係は、友達と呼べるのでしょうか。それが、間違っていることだと分かったのは、友達のおかげでした。私の周りには、自分の考えをしっかりと持っている友達がいます。その友達

は私と意見が違っているときには違うと、はっきりと言ってくれます。それによって私は自分の誤りや相手の意見の良いところに気が付くことができます。相手との仲が良くなれば良くなるほど、仲を壊したくない一心で、自分の思っていることを言えなくなる時もあります。しかし、それを恐れて自分を隠しているばかりでは、本当の信頼関係は築けません。友達とはお互いを理解し、心を許し合ったうえで初めて友達と呼べるものだと思います。そのためにはまず自分自身の意見を持つこと、「自分らしさ」を持つことが何よりも大切なのだと思いました。

「自分らしさ」は、人々の間から差別をなくすうえでも重要なものだと思います。今日、世界中には、さまざまな人権問題が存在しています。しかし、私は人を肌の色や住む場所で判断することは、決してあってはならないことだと思います。そもそも、人にはそれぞれ違いがあることは当たり前のことです。誰かとまったく同じ人間などいません。人と違うことは恥じることではなく、むしろ誇るべきことだと思います。

また、友達と信頼関係を築いたり、世界から差

別を無くしたりするためには「自分らしさ」を持つこと以外にも必要なことがあります。それは「相手らしさ」を知ったうえで分かり合うことだと思います。自分の考えを持つことはとても重要なことです。しかし、その考えを相手にも押しつけようとすることは違うと思います。例えば宗教などの違いがきっかけで争いが生まれてしまうことが、世界では少なくありません。人々がお互いに理解することはなしには、争いが消えてなくなる日が来ることは決してないのだと思います。

私は、この作文を書いてみて、「自分らしさ」をしつかりと持つこと、そして「相手らしさ」をよく知ることの大切さに気付かされました。この二つを実現させることは決して難しいことではないと思います。世界から急に差別や争いをなくすことはできませんが、私たち一人一人がそれぞれの個性を尊重し、認め合うことによって、それらが生まれることを防ぐことや、少しずつ減らすことはできるのだと思います。

「一人」になる恐怖

高三

私は、小学生の頃、いじめを受け、人と接するのが怖くなり、一人でいることが多い時期がありました。「またあいつにいじめられる。」「もしかしたらこの人は、あいつと仲がいいのかも。」「と考えているうちに、見えている人全てがいじめをしている人と仲が良く、自分をいじめようとしているのではと思うようになり、私は、同級生から距離をとるようになりました。信じられる人がいない、そのときの気持ちは、とても辛いものでした。

でも、私に声をかけてくれた人がいました。「だいじょうぶ？」とか、「気にするなよ。」と私を励ましてくれました。たった一人の言葉でしたが、私はとても嬉しかったです。その人は、友達を紹介してくれたたり、遊んでくれたりと、私から「一人」でいる時間を無くしてくれました。

「一人」でいるときの辛さは、それから感じなくなり、人と接する恐怖も少しずつ消えていきました。今の私がいるのは、あのとき、あの人が声

をかけてくれたからだと思います。もし、誰も声をかけてくれなかったら、私は学校に通えていなかったかもしれません。

私は、話しかけてくれる「誰か」がいることが大切だと思います。自分を気にかけてくれる、心配してくれる人がいる、その思いだけで、立ち直れる人もいるのです。泣いている人、落ちこんでいる人に声をかけてみる。いじめを受けている、いじめられている人を見た。そのときには、いじめを止める、相談にのるなど、その行動が、人を救うことのできる手段の一つだと思います。私も、調子が悪い人や落ち込んでいる人に積極的に声をかけています。「一人」になる状態にしないようにすることが大事なのです。

今、そのような状態の人が近くにいるならば、まずは声をかけてみる。それだけでその人の人生は大きく変わるかもしれません。「一人」ではないという「安心」を与えることが、私が考える本当の優しさだと思います。

「はばたき」活用例

小学校活用例

掲載作文



「初めて知った当たり前」

第二学年 道徳

○資料名

「ぐみの木と 小鳥」

(出典 「みんなのどうとく」 学研)

○ねらい

身近な人を思いやり、温かい心で接し、親切にしようとする態度を育てる。

○活用の仕方

終末に読み聞かせ、相手のことを思いやって行動し、親切にすることの気持ちよさに気付かせる。

○活用の効果（児童の感想）

人にしんせつにすることは、とてもたいせつなことです。友だちとなかよくすることは、とてもたいせつなんだなと思いました。

第五学年 道徳

○資料名

「最後のおくり物」

(出典 「私たちの道徳」 文部科学省)

○ねらい

誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする態度を育てる。

○活用の仕方

終末に読み聞かせ、相手の立場を考えて思いやりを行動に表せるようになることなどについて考えさせる。

○活用の効果（児童の感想）

私は、今日の授業で習った「親切」という言葉の意味をよく理解することができました。

今まで私は恥ずかしくてあまり言うことができなかったけれど、授業の最後に先生が読んでくれた電車での話を聞いて、ゆずり合いをすることが大切だと感じました。

第五学年 学級活動

○ねらい

支援籍児童との交流を通して、誰に対しても思いやりをもち、平等に接することのできるようにすると共に、困っている人や弱い立場の人に自ら進んで優しくできるようにする。

○活用の計画

- ①事前指導
- ②話し合い
- ③ミニ運動会に向けて準備
- ④ミニ運動会
- ⑤振り返り（掲載作文の活用）

最後の振り返りの場面で読み聞かせ、誰に対しても当たり前に思いやりのもてるクラスを作っていこうと意識づける。

○活用の効果

思いやりをもって行動したいという児童の感想が聞かれた。授業後、周囲に優しくできる児童が増えてきている。

小学校活用例

掲載作文

「はだ色」



○ねらい

人権作文集『はばたき』を活用し、共通のテーマへの感想を深め合い、児童の人権意識の高揚と、身の回りの様々な人権侵害や差別の問題を多角的に見る目を養うため、全校児童の意見交流する場として掲示場所を設ける。

○活用の仕方

- 一 「はだ色」について校長講話で取り上げ、その概要を掲示する。
- 二 感想を記入させ、各クラス代表児童一名を人権コーナーに掲示する。
- 三 掲示された感想を読んで思ったことや感じたことを花型付箋に書かせ、代表児童の感想の周りに貼る。
- 四 同じテーマに対する感想を持たせ、そこから学年を超えた個々の意見を全校児童で更に深め合わせる。

○児童の感想（掲示代表）

- ・ クレヨンのはだ色は、いろいろなはだの色があるのになんでひとつの色なんだろうなとおもいました。ひとつの色だけだとみんな、くやしくなったりします。 【二年】
- ・ 自分たちと違うからとか、うざいとか自分勝手な理由でいじめるのと似ています。そういう人を注意したり止めたりできるようにしたいです。 【六年】

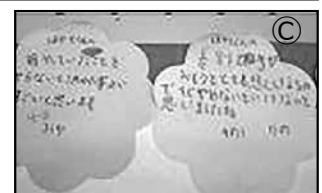
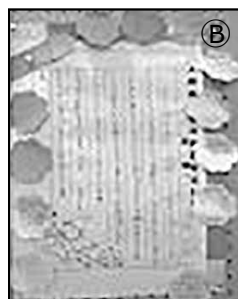
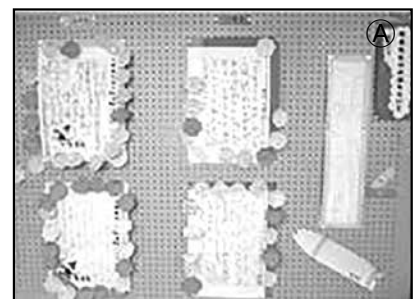
○掲示代表児童へのコメント

- ・ ともだちとじぶんをたいせつにしなきゃだね。わたしもたいせつにしようとおもったよ。 【二年生へ 六年生より】
- ・ 最後の「人それぞれを大切に生きていく」ということに感動しました。 【五年生へ 六年生より】

○活用の効果

- 一 共通の話題から個々に自分の感想を持たせた後、同学年、異学年の児童の意見に触れることで、自己と比較し、考えを広げることができた。
- 二 代表児童へのコメント（付箋）を通し、多角的な考えに触れ、深めることができた。
- 三 付箋によるコミュニケーションを通し言葉を大切にしようとする意識が高まり、人権意識の高揚に結びついた。
- 四 代表児童への感想に対するコメントを見て、多面的な考えに触れ、互いの意見を尊重し合う態度が育った。

○掲示の様子



- ①全体掲示
- ②個人の感想
- ③感想に対するコメント

○掲示の様子



作文の全文と、児童の感想

中学校活用例



※掲載作文はそれぞれの活用例で紹介

全学年 総合的な学習の時間

○学習課題 「国際理解」

○掲載作文 「一足のくつで一つの笑顔」

○活用の仕方

一 学習を通して、「私たちにできることは何か」を話し合う。

二 生徒会で活動している文房具回収を話題にあげ、「一足のくつで一つの笑顔」を読む。

○活用の効果（生徒の感想）

一 無意識に、発展途上国の人々を差別していたことに気づいた。自分の考えを改めたい。

二 このことは、国際理解だけでなく、日々の生活の中でも大切なことである。

三 自分たちがいかに恵まれているかを改めて感じた。感謝の気持ちを持ち、自分たちにできることを、小さなことから始めていきたい。

第二学年 道徳

○資料名 「国境線が鍛える共生の思考」

（出典 「中学生の道徳」 廣済堂あかつき）

○掲載作文 「一足のくつで一つの笑顔」

○ねらい

地球人の一人としての自覚を深め、世界の平和と人類の幸福を希求する道徳的心情を育む。

○活用の仕方

一 難民の現状と本時のねらいを知る。

二 資料を読む。

三 資料の印象をワークシートに書かせる。

四 ワークシートの食料自給率のグラフから、日本の食料自給率が低いことについてどう思うか話し合わせる。

五 資料中にある「よそ行きの服を着た子供の写真」をみてどう思うか話し合わせる。

六 人権作文「一足のくつで一つの笑顔」を読んで、感じたことや考えたことをワークシートに書かせる。

七 国際貢献のあり方について、私たちが大切にしなければならないことを考えさせる。

○活用の効果

ボランティア活動があるということを知ることができたと同時に、自分たちと同じ中学二年生が実際に行動していることに刺激を受け、自分自身も何かしなくてはと感じた生徒が多かった。

第三学年 社会（公民）

○ねらい

日本国憲法の保障する権利にはどのようなものがあるか理解する。

○掲載作文 「小さな命」

「世界の子供たちの人権について」

「障害のある人と共に生きる」

○活用の仕方

現代社会の課題をとらえる事例として掲載作文を紹介し、どのような権利が侵害されているか考えさせる。

○活用の効果

事例（作文）から読み取ること、生徒が人権について具体的にとらえ、学習内容に結び付けることができた。

全学年 人権週間での取組

【校長講話での活用】

校長講話のあとに、一人一人が人権作文に取り組む。書く際の参考にする。

○掲載作文 「母から学んだ思いやり」

「障害のある人と共に生きる」

【体験活動での活用】

アイマスク・車いす・老人疑似体験活動のあと、振り返りを行うときに、作文を読み聞かせる。

○掲載作文 「障害」大切なメッセージ

「偉いことが当たり前になる世の中へ」

※人権週間 十二月四日～十日

高等学校活用例



※掲載作文はそれぞれの活用例で紹介

全学年 総合的な学習の時間

○学習課題

いじめと向き合う

○掲載作文 「言葉＝刃物」

『「一人」になる恐怖』

○活用の仕方

掲載作文を読ませ、いじめに向き合う行動を考えさせる。

○活用の効果

同世代の体験は、生徒の心に重く響いた。自分の経験と重ね合わせる生徒もあり、自分事としていじめと向き合うことができた。

人権週間での取組

【校長講話での活用】

校長講話のあとに、一人一人が人権作文に取り組む。書く際の参考にする。

○掲載作文 「社会と私」

第二学年 現代文

○活用の仕方

下記のプリントを配布し、人権についての意見文を書かせる。

○活用の効果（生徒の意見文より抜粋）

【掲載作文 「言葉＝刃物」】

言葉は簡単に発せる。だけど、言葉を受けた人の心にずっと残り続ける。後から取り消すことはできない。だから、思ったことをそのまま発するのではなく、相手の気持ちを考え、思いやりを持って初めて言葉にするのがいいと思う。

【掲載作文 『自分らしさ』と『相手らしさ』】

自分の個性を出し過ぎて相手を傷つけてしまったり、相手の個性を認めずにいたら、「自分らしさ」と「相手らしさ」の相互関係は成り立たないと思います。自分の良いところや個性を出しつつも相手の個性を引き出し、認め、相手の意見を尊重していくことで、「自分らしさ」と「相手らしさ」のバランスが保たれ、相互関係が成り立ち、世界から差別がなくなっていくと思います。

【掲載作文 『「一人」になる恐怖』】

学校にいる間は一人ではいたくない。ほとんどの人がそう思うだろう。ではなぜ人は一人でいたくないと分かっているのにいじめが起きるのだろうか。それは自分が一人にならないためである。「あの子は無愛想だ」などと言い、共感させて話題を共有することで仲間をつくる。そうやって誰かを犠牲にしているのだと考えられる。こうしていじめが起ってしまうのだ。

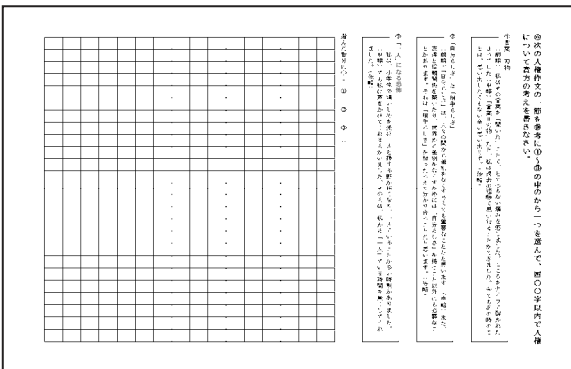
○授業者より

「人権作文を書きましょう」と単に指示するよりも、生徒は人権課題に向き合うことができ、意見文が書きやすかったようである。

←現代文における活用例で使用したプリント

【活用した作文】

- 言葉＝刃物
- 「自分らしさ」と「相手らしさ」
- 「一人」になる恐怖



作品掲載者一覧

(五十首順)

小学校の部

新船 大芽	長瀬町立長瀬第二小学校
伊藤 結衣	桶川市立桶川西小学校
岩本 一志	飯能市立飯能第一小学校
遠藤 ころも	狭山市立入間川東小学校
木村 もも	皆野町立皆野小学校
小山 惺	志木市立宗岡第二小学校
染谷 飛実	越谷市立新方小学校
田中 愛桜	本庄市立共和小学校
中澤 葵	美里町立東児玉小学校
西出 さくら	上尾市立今泉小学校
久野 芽愛	新座市立西堀小学校
三枝 快乃	羽生市立井泉小学校
森田 啓斗	寄居町立鉢形小学校
柳 ももみ	川口市立鳩ヶ谷小学校
吉沢 京二	行田市立下忍小学校
若林 優海	所沢市立安松小学校

中学校・高等学校・特別支援学校の部

石橋 愛美	県立伊奈学園総合高等学校
碓井 達基	蕨市立第二中学校
小澤 綺花	北本市立西中学校
加藤 靖也	白岡市立菁莪中学校
加藤 羽奈	東松山市立北中学校
木田 侑希	県立皆野高等学校
齋藤 満生花	桶川市立桶川中学校
坂本 ひかり	秩父市立秩父第二中学校
竹内 啓斗	県立児玉白楊高等学校
田島 麻美	本庄市立児玉中学校
田中 亜実	小鹿野町立小鹿野中学校
富澤 凜	春日部市立春日部中学校
中島 萌絵	県立越谷特別支援学校
橋本 唯羽	三郷市立栄中学校
矢澤 一真	川越市立野田中学校
吉田 智咲	深谷市立岡部中学校

表紙絵

「海のわくわくランド」

小倉 彩楓

八潮市立大曾根小学校

「はばたき」第四十集編集委員一覧

石田 優妃	吉川市立南中学校	教諭
市川 幸世	県立上尾南高等学校	教諭
内田 智	北本市立西中学校	教諭
恩田 工	東松山市立南中学校	教諭
小林 恵美	県立春日部女子高等学校	教諭
佐國 真理子	秩父市立西小学校	教諭
佐藤 恵子	寄居町立城南中学校	教諭
田部井 訓子	深谷市立上柴西小学校	教諭
寺村 知美	ふじみ野市立東台小学校	教諭
福田 直美	久喜市立鷺宮小学校	教諭
森脇 秀幸	朝霞市立朝霞第四小学校	教諭

人権教育実践報告会発表作文集

「はばたき」第40集

発行 埼玉県教育委員会

編集 埼玉県教育局市町村支援部人権教育課

〒330-9301 さいたま市浦和区高砂 3-15-1

電話 048-830-6895

<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/f2218/>

